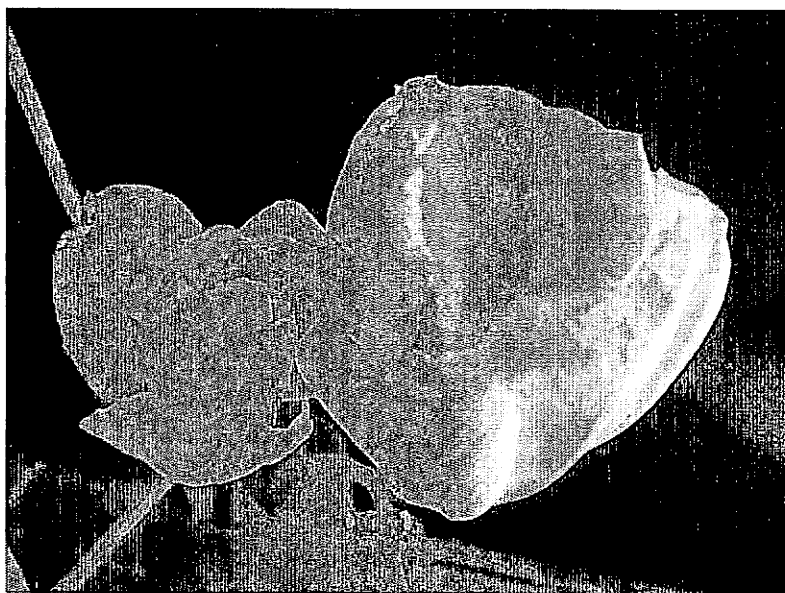


平成 1 9 年 度

研 究 集 録

— 川越市教育委員会委嘱学校研究 —



川 越 市 教 育 委 員 会

あいさつ

川越市教育委員会教育長 山浦秀男

教育を取りまく環境はめまぐるしく変化しています。改正教育基本法の成立を受け、今年度はいわゆる教育3法が成立し、43年ぶりとなる全国学力・学習状況調査が実施されました。さらに、平成20年3月には新しい学習指導要領が告示され、地域や保護者からの教育に対する関心はますます高まっています。教育に携わる者は、国の動向に目を向けながら、新しい学習指導要領にも引き継がれる「生きる力」を今後も児童生徒に身に付けさせる必要があります。

県では「生きる力」をはぐくむ教育を一層推進するために「教育に関する3つの達成目標」を作成し、「学力」「規律ある態度」「体力」の3つの分野において、着実な成果を上げています。

平成19年度川越市教育委員会委嘱の各学校研究においても、大きな成果を上げられ、ここに「研究集録」として刊行されることとなりました。それぞれの研究主題に沿い、学校をあげて真摯に研究に取り組まれた姿勢に対し、心から敬意と謝意を表すものであります。

本年度、各研究委嘱校では、各教科及び特別活動について研究を推進していただきました。特に、2年目を迎えた5校につきましては、それぞれの学校の特色を生かした研究成果が発表され、「生きる力」の育成に向け、多くの示唆を与えてくださいました。

各校におかれましては、ここに紹介された学校研究の成果を、平成20年度の自校の指導計画の見直しや指導方法の工夫改善に積極的に活用していただくことを期待しております。

結びに、委嘱研究に携わってこられた各学校及び関係の先生方の御尽力と、御指導くださいました関係各位の御厚意に対し、改めてお礼申し上げ、あいさつといたします。

目 次

(学校名)	(研究主題)	(ページ)
【2年次】		
川越第一小学校	「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」 ～考えや思いを進んで伝え合う力を育む国語科指導法の工夫・改善～	1
泉小学校	「一人一人の学びを大切にする国語科・算数科指導」	5
南古谷小学校	子どもたち一人一人に「生きる力」を育む教育の推進 — 「教育に関する3つの達成目標」の実践を通して —	9
霞ヶ関北小学校	「豊かな学びを育む授業の創造」 — 指導方法の工夫・改善を目指して —	13
川越第一中学校	「実践的コミュニケーション能力育成のための基礎・基本の定着」 — A Balanced Activities Approach の実践を通して —	17
【1年次】		
月越小学校	「主体的に生きる力を身に付ける児童の育成」 — 思考力を高めるためのコミュニケーション能力の育成をめざして —	21
高階北小学校	「学ぶ喜び 笑顔輝く 高北っ子」 — 豊かに学び合う算数科の学習活動を通して —	25
高階西小学校	「子どもが生き生きと活動する算数科指導法の工夫・改善」	29
寺尾小学校	「児童一人一人に確かな読みを身に付けさせる指導法の工夫」	33
大東東小学校	「のびる・できるを目指した体育科指導法の研究」	37
霞ヶ関東小学校	認め合い、分かり合う心豊かな児童の育成 ～「伝え合う力」を大切にした学級活動の実践を通して～	41

「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」

～考えや思いを進んで伝え合う力を育む国語科指導法の工夫・改善～

川越市立川越第一小学校

研究のポイント

「進んで伝え合う力」を育成するために、

- 学年の系統性を踏まえた教材を開発し、継続的に取り組む場を設定することにより、「話すこと」「聞くこと」における基礎・基本の定着を図る。
- 学習過程において、話し合いの場を意図的に設定し、お互いのよさに気づくようにする。
- 評価のあり方を明確にし、評価方法の工夫・改善を図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

指導方法の工夫・改善を通して

- ① 話すこと・聞くことにおける基礎・基本の定着を図り、確かな学力を身につけること
- ② 進んで話し合いに参加し、相手の意図をつかみながら、自分の考えや思いを伝え合う力を育成すること

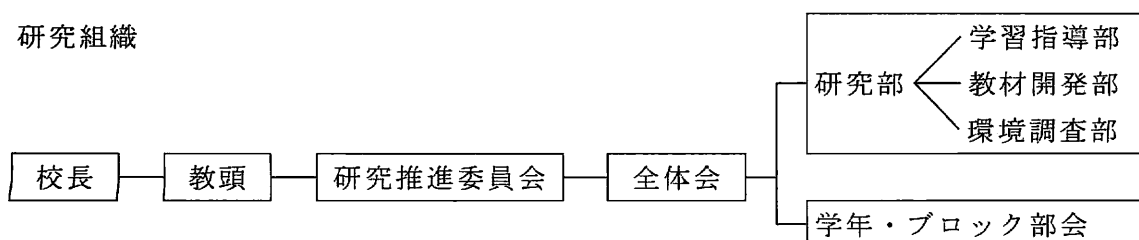
をねらいとして、研究を進める。

(2) 研究主題設定の理由

本校児童の実態として、学習への探求心や理解力は一定程度の力量を持っているものの、その過程や結論を自分なりの言葉で表現することを苦手とする児童が多く見られるという傾向がある。そのため、自分の思いを伝えることや相手の意図を汲み取ることがうまくできないため、トラブルになったりすることがある。そこで、この課題解決のためには、自ら進んで学習するための手だての開発や「話すこと・聞くこと」の力の育成が必要であるということが全職員の間で共通理解された。

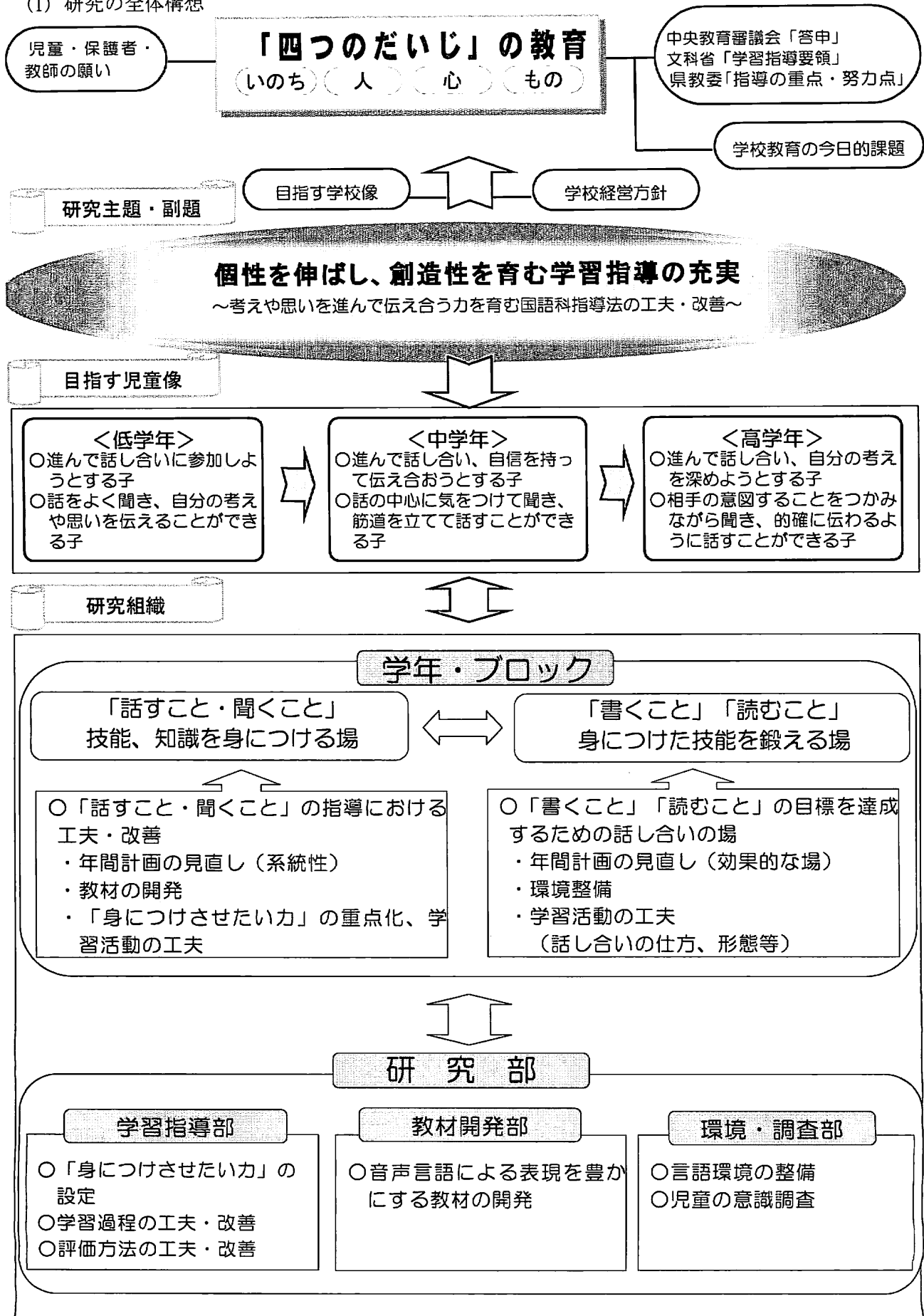
これらのことから、本校の教育目標である「四つのだいじ(いのちをだいじに・人をだいじに・心をだいじに・ものをだいじに)」の具現化を目指し、「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」を研究主題に、副題として「考えや思いを進んで伝え合う力を育む国語科指導法の工夫・改善」に設定した。そして、課題の把握とテーマに迫るための仮説設定及びその検証という過程を通して、各研究部組織が仮説を具体化しながら、授業研究を中心に研究を進めていくこととした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究の全体構想



(2) 研究仮説

<仮説1>

- ・学年の系統性をふまえた教材を開発し、継続的に取り組む場を設定すれば、「話すこと」「聞くこと」における基礎基本が定着し、進んで伝え合う力が身につくだろう。

<仮説2>

- ・学習過程において、話し合いの場面を意図的に設定すれば、お互いの考えのよさに気づき、進んで伝え合う力が身につくだろう。

<仮説3>

- ・評価のあり方を明確にし、評価方法の工夫・改善をすれば、伝え合うよさが分かり、進んで伝え合う力が身につくだろう。

3 実践事例

(1) 仮説1

- ① 毎時間5分間、発声練習やスピーチの場を設定する（やまびこタイム）。

ア 発達段階に応じた資料の精選

イ 学習内容に適した題材の吟味

ウ スピーチ技能の習得

- ② 学年の系統性を踏まえた単元を工夫・改善し、教材を開発する。

ア 「話すこと・聞くこと」の目標、内容を重点化した単元の工夫・改善、教材の開発

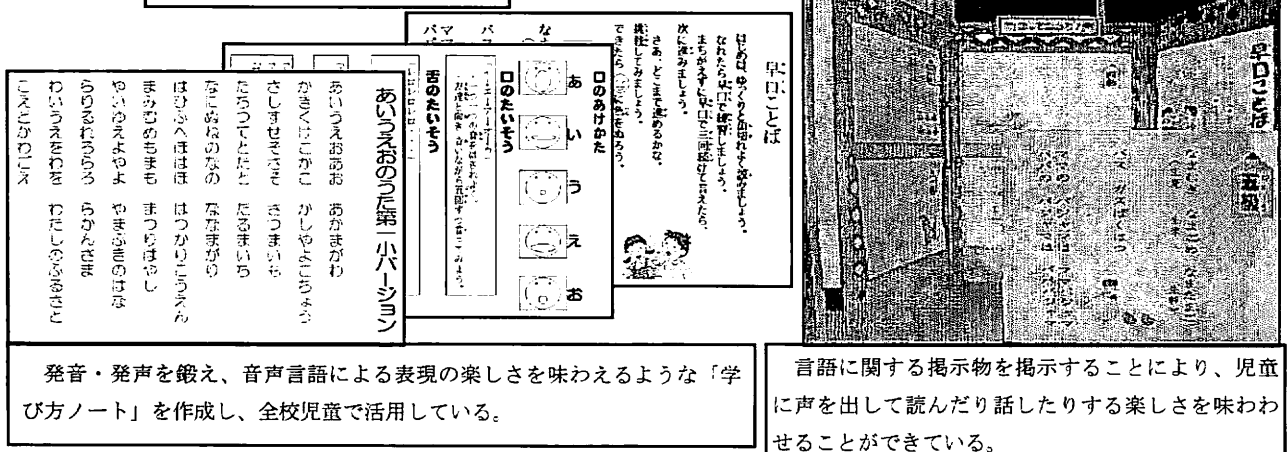
- ③ 言語環境の整備に努める。

ア 「声のものさし」「話し上手・聞き上手」等教室掲示物の充実

イ 学年掲示板、わくわく広場の国語コーナー

学び方ノート（低・中・高別）

わくわく広場の国語コーナー



(2) 仮説2

- ① 「書くこと」「読むこと」を主領域とした単元においても、話し合いの場を設定する。

ア 「書くこと」「読むこと」の目標達成手段としての話し合いの場の設定

イ 「話すこと」「聞くこと」の目標や内容を明確にした学習活動

ウ 年間指導計画の見直し

- ② 「基礎・基本」となる「身に付けさせたい力」を設定する。

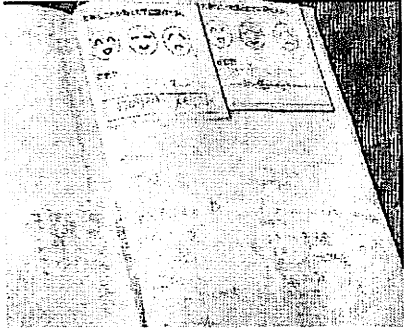
ア 「話すこと」における態度、技能、言語事項

イ 「聞くこと」における態度、技能

(3) 仮説3

- ① 「話すこと」「聞くこと」における評価規準を明確にする。
- ② 児童の実態把握に努める。
 - ア 「話すこと」「聞くこと」に対する児童の意識調査の実施
 - イ 個に応じた指導、支援のあり方の考察
- ③ 評価方法を工夫・改善する。
 - ア 自己評価カードの作成…発達段階に応じ、評価の観点を明確にする
 - イ 共感的理解に基づく相互評価の実践…伝え合うことのよさに気づかせる
 - ウ 補助簿等の活用…個票や座席表、名簿等を活用し、個に応じた指導に生かす。

自己評価カード



具体の評価規準

評価項目	評価規準	評価方法
話すこと	相手の話を最後まで聞きとらえている。	観察
聞くこと	相手の話を最後まで聞きとらえている。	観察
話し合い	相手の話を最後まで聞きとらえている。	観察

こくごアンケート

話し・聞く 実態

1. こくごの楽しさを覚えているか。
2. こくごの楽しさを伝えることができるか。
3. こくごの楽しさを伝えることができるか。
4. こくごの楽しさを伝えることができるか。
5. こくごの楽しさを伝えることができるか。
6. こくごの楽しさを伝えることができるか。
7. こくごの楽しさを伝えることができるか。
8. こくごの楽しさを伝えることができるか。
9. こくごの楽しさを伝えることができるか。
10. こくごの楽しさを伝えることができるか。

観点を明確にした自己評価カードを毎時間活用し、児童に達成感を味わせるとともに、児童の自己評価能力を養った。

個に応じた適切な評価が行えるよう、具体の評価規準を基に、自己評価カードや評価シートなどを作成し、評価方法の工夫を行った。

4 成果と課題

(1) 成果

- ・やまびこタイムの取り組みにより、音読が上手になるとともに、自信をもって声を出すことのできる児童が増えた。
- ・「声のものさし」「話し上手・聞き上手」などにより、話し合いにおける適切な声の大きさや態度・技能が向上した。
- ・話し合いの経験を積むことにより、話し合いの仕方が定着した。また、目的を明確にした話し合いを通して、自分の考えを積極的に話すとともに、相手の意図を汲みながら聞くことができる児童が増えた。
- ・自己評価・相互評価により、児童は達成感を味わい、次時への意欲を高めることができた。評価カードへの継続的な取り組みを通して、客観的に活動を振り返る姿勢が身についた。

(2) 課題

- ・話し合うことのよさを実感でき、児童が主体的に話し合うことができる効果的な場を、国語科から更に他教科等にも見出していく。
- ・児童の実態や地域性を生かした単元および教材の開発を行っていく。
- ・「話し合い」は、「話すこと」「聞くこと」両者の力が複合的に作用するものであると考える。今後は、「話し合い」が成立するための要素を追究し、更に「伝え合う力」を育んでいく。

「一人一人の学びを大切にする国語科・算数科指導」

川越市立泉小学校

研究のポイント

- 児童の実態と教材研究により、基礎的・基本的な学習内容を重点化し、指導計画に位置づけ基礎・基本の確実な定着を図る。
- ワークシート、ノート指導及び板書を工夫することで、問題（課題）解決学習の基本的な学習過程（学び方）を確実に身に付けさせる。
- 自分の考えを分かりやすく相手に伝えたり、相手の考えを自分の考えと比べながら聞いたりする力を身に付けさせる。
- 発問や発表の取り上げ方を工夫したり、指導形態を工夫したりすることで、一人一人の考えを活かす。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

児童一人一人に基礎・基本を確実に身に付けさせること、確かな学力を定着させることが強く求められている。身についた基礎・基本が次の学びや自己表現を支えるものとして働くことが実感できたとき、児童自らが学ぶ大切さ、学びたいという意欲を持つことができる。生きて働く「確かな学力」を身に付けさせるために、国語科、算数科を中心とした研究を行う。

- ①基礎・基本の確実な定着を図る
- ②課題解決的な学習、問題解決学習を通して学び方を学ばせる
- ③コミュニケーション能力を育成して、学び合いを深めさせる
- ④一人一人に応じた指導をさらに進める

(2) 研究主題設定理由

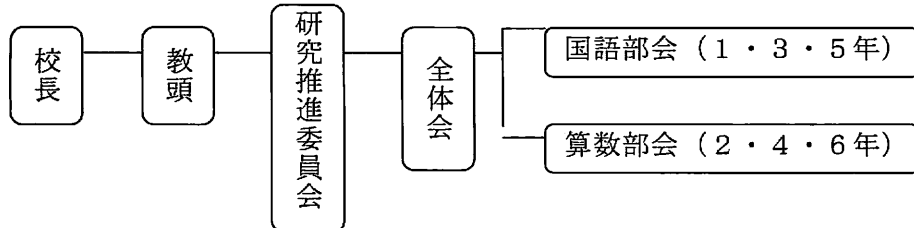
本校主題設定に当たっては次の3点を根拠とした。

- ① 学校教育目標の具現化の視点から
 - ・分かる授業、友だちと学びあう授業を追求し、基礎・基本の定着、自ら学び自ら考える力の育成、よりよい人間関係の形成を目指す。
- ② 今日的な課題から
 - ア 確かな学力向上のための2002アピール「学びのすすめ」より
 - ・きめ細かな指導で基礎・基本や自ら学び自ら考える力を身に付けさせる
 - ・発展的な学習で一人一人の個性等に応じて子どもの力をより伸ばす
 - ・学ぶことの楽しさを体験させ、学習意欲を高める
 - ・学ぶ機会を充実し、学ぶ習慣を身に付けさせる
 - イ 国語科算数科学習指導要領のねらいより
 - ・基礎・基本の定着
 - ・伝え合う力の育成
 - ・楽しさと充実感のある学習
 - ・児童の主体的な活動の重視
 - ウ 教育に関する3つの達成目標より
 - ・「読む」「書く」「計算」は学力の土台
 - ・基礎的・基本的な学習内容の定着
 - エ PISA学習到達度調査より
 - ・読解力の低下
 - ・学習意欲や学習習慣の不足

③ 児童の実態から

- ・標準学力検査、入間学力調査などでは、やや平均を上回っている。
- ・計算練習や漢字練習にはよく取り組んでおり、力を付けつつあるが、思考力や理解力を必要とする問題については苦手とする児童が多い。また興味関心、知識理解、表現などいろいろな点で個人差も大きい。
- ・話し方、聞き方など、人とのコミュニケーション能力が身につけていない。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究の仮説

① 基礎・基本の定着

基礎的・基本的な学習内容を明らかにし、重点化した学習を行えば基礎・基本が定着するだろう。

② 課題解決的な学習・問題解決学習

課題解決的な学習や問題解決学習を通して、学び方を定着させれば見通しをもって学習に取り組むことができだろう。

③ コミュニケーション能力

話し合い活動が効果的に行われれば、互いの考え方のよさが分かり、学びを広げたり深めたりすることができるだろう。

④ 一人一人に応じた指導

児童の実態に応じて学習形態を工夫したり、適切な支援や助言を行ったりすれば、より主体的な学習となるであろう。

(2) 手立て

① 基礎・基本の定着

- ・児童の実態に照らした学習内容の重点化
- ・重点化した学習指導計画の作成
- ・チャレンジタイムの活用

② 課題解決的な学習、問題解決学習

- ・基本的な学習過程による学び方の徹底
- ・板書の工夫
- ・学習コーナーの活用

③ コミュニケーション能力

- ・話し合いの観点の明確化
- ・聞き手を意識した話し方、説明の仕方
- ・自分の考えと比べながら聞く聞き方
- ・考えを深め、広げる話し合いの工夫

④ 一人一人に応じた指導

- ・事前テストや初発の感想をもとにした児童の実態把握
- ・座席表を活用した指導
- ・支援計画の作成
- ・特に配慮を要する児童の指導、支援計画
- ・学習を振り返る評価の工夫

3 実践事例 ー第5学年国語科学習指導案「わらぐつの中の神様」本時の展開よりー

学習活動	学習内容	○指導・支援 ◎評価の創意工夫 特に配慮を要する児童への支援(◇)	備考
1 本時の学習課題を確認する。	○学習課題の確認	○初発の感想・学習計画から課題を確認する。	初発の感想
おみつさんのわらぐつに対する思いから、おみつさんの人柄を読み取ろう		◎本時の課題がつかめたか。 (態度・観察)	短冊
2 P12L11～P17L13を音読する。 3 課題に沿った読みをする。	○一斉音読 ○読みの視点 ・会話文 ・行動描写 <読みとる内容> ・おみつさんの人柄 <読み方> ・おみつさんの会話文や行動描写に着目した読み方 <押さえる表現> ・毎晩、家の仕事をすませてから ・少くはく格好が悪くてもはく人がはきやすいように、あったかいように、少しでも長持ちするようと、心をこめて、しっかりしっかりわらぐつを編んでいきました。	○場面の確認をしながら、確実に声に出して読むようにさせる。 ○課題を解決するために前時と同じように会話文や行動描写に注目することを確認する。 ○わらぐつを作っているとき、わらぐつを売りに行くとき、わらぐつを売っているときのおみつさんの思いから人柄を読み取らせるようにする。 ○自分の考えをノートにまとめさせるようにする。 ○読みとるためのヒントカードも用意し、個に応じて渡す。 ○課題を読みとるために必要な部分にだけサイドラインを引くようにさせる。 ○サイドラインを引いたページに付箋を貼らせ、次時にいかせるようにする。 ◇おみつさんのわらぐつに対する気持ちがわかる描写の書かれたヒントカードを渡し、おみつさんの気持ちを書き込ませていく。	座席表 ヒントカード 付箋
◎おみつさんの会話文や行動描写から、おみつさんの人柄を読みとっている。(ノート、発表、観察) →おみつさんの人柄がわかる叙述を適切にぬき出し、サイドラインを引いている児童にはノートに人柄をまとめさせるように助言する。 →おみつさんの人柄が読み取れる部分にサイドラインが引いている児童には、全部でなく中心語句にだけ引くように支援する。 →読みとる内容が書き出せない児童には、おみつさんの人柄がわかる叙述の書いてあるヒントカードに気持ちを書き込ませていく。			
4 読みとったことをクラス全体で交流する。	○おみつさんの人柄	○意図的指名をする。 ○どの叙述からどういう人柄を読みとったのかが分かるように発表させる。 ○教師の発問に対して答えるだけでなく、友達の意見に対しても意見を言うようにさせる。 ○わらぐつをはく人の気持ちになってわらぐつを作った、おみつさんの考え方をおさえる。	
5 まとめの交流をする。	○課題に対するまとめ	○自分の言葉でまとめるようにする。 ○まとめを発表させる。(意図的指名)	

4 研究の成果と課題

(1) 国語科の成果

- ・サイドライン、書き込みなどの読みを深めるための手立ての工夫により、叙述に即した読み取りがより一層できるようになってきた。
- ・課題解決的な学習を取り入れたことにより、課題を明確にとらえ、今まで以上に主体的に学習できるようになった。
- ・ペアやグループでの話し合いを通して、友達の考えと比べながら聞いたり、自分の考えを述べたりできるようになり、読みを一層深めることができるようになってきた。
- ・座席表を活用した支援計画を作成することで、きめ細かな支援ができるようになってきた。

(2) 国語科の課題

- ・叙述に即した読み取りや話し合いの経験を積み重ね、定着させ、主体的な学習ができるようにしていく。
- ・聞く観点を明確にし、相手を意識した聞く力を更に伸ばしていく。
- ・座席表を活用した支援計画を着実に実践して積み重ね、一人一人に応じた支援をしていく。

(3) 算数科の成果

- ・学び方が身に付き、より主体的に課題に取り組むことができた。
- ・自分の考えを整理して話そうとしたり、自分の考えと比べながら相手の発言を聞こうとしたりする姿勢が身に付いてきた。
- ・効果的な板書やノート指導、指導形態の工夫などから、数学的な考え方を身に付けさせることができるようになった。

(4) 算数科の課題

- ・身に付いてきた話す力・聞く力を高め、算数の思考力を一層伸ばしていく。
- ・一人一人の学びを大切にする支援・指導の方法や、児童が自分の学習を振り返る活動を充実させる手立てを追求する。
- ・学び合いを高める授業展開や学び合いに効果的な学習形態について、6学年を見通して系統性や発展性が持てるよう研究を進める。

研究主題 ● 子どもたち一人一人に[生きる力]を育む教育の推進

— 「教育に関する3つの達成目標」の実践を通して — ●

川越市立南古谷小学校



研究のポイント

平成19年度

- 国語・算数・体育を中心として、「できる」「分かる」を実感できる授業を行う。→「教育に関する3つの達成目標」の実践
- 学習を支える規律ある態度、道徳的実践力の向上を目指す。
- 家庭・地域・学校が一体となって、「生きる力」を育成する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい 子どもたち一人一人に[生きる力]を育む教育の推進
— 「教育に関する3つの達成目標」の実践を通して —

- ①「読む」「書く」、「計算」の領域を中心とした基礎的・基本的内容を、子どもたち一人一人に確実に身に付けさせるため、指導と評価の工夫・改善を図る。
- ②子どもたち一人一人に、社会の一員として守らなければならないいきまみや行動の仕方を身に付けさせ、規律ある態度、道徳的実践力の向上を目指す。
- ③授業や業前運動等の時間を通じて、子どもたち一人一人が設定する「体力向上目標値」の実現を目指す。
- ④家庭・地域・学校が一体となって、「生きる力」を育成する。

(2) 研究主題設定理由

南古谷地区は、市内でも人口増加率が高い地域である。本校の児童数も年々増加し、現在では市内で2番目の規模となった。学校の内外は活気に満ち、学校行事や地域行事がいつも活発に行われている。

本校児童の生活経験、学習経験は様々である。日々の授業では、児童一人一人の個性を生かした学習活動を展開し、指導と評価の工夫・改善に努めている。しかしながら、生活面、健康面、学習面で個別の支援が必要な児童も見受けられる。

子どもたち一人一人が、将来に向けて自らの可能性を実感できるように、本校では、「教育に関する3つの達成目標」の実践を通して、子どもたち一人一人に[生きる力]を育む教育の推進に取り組んできた。

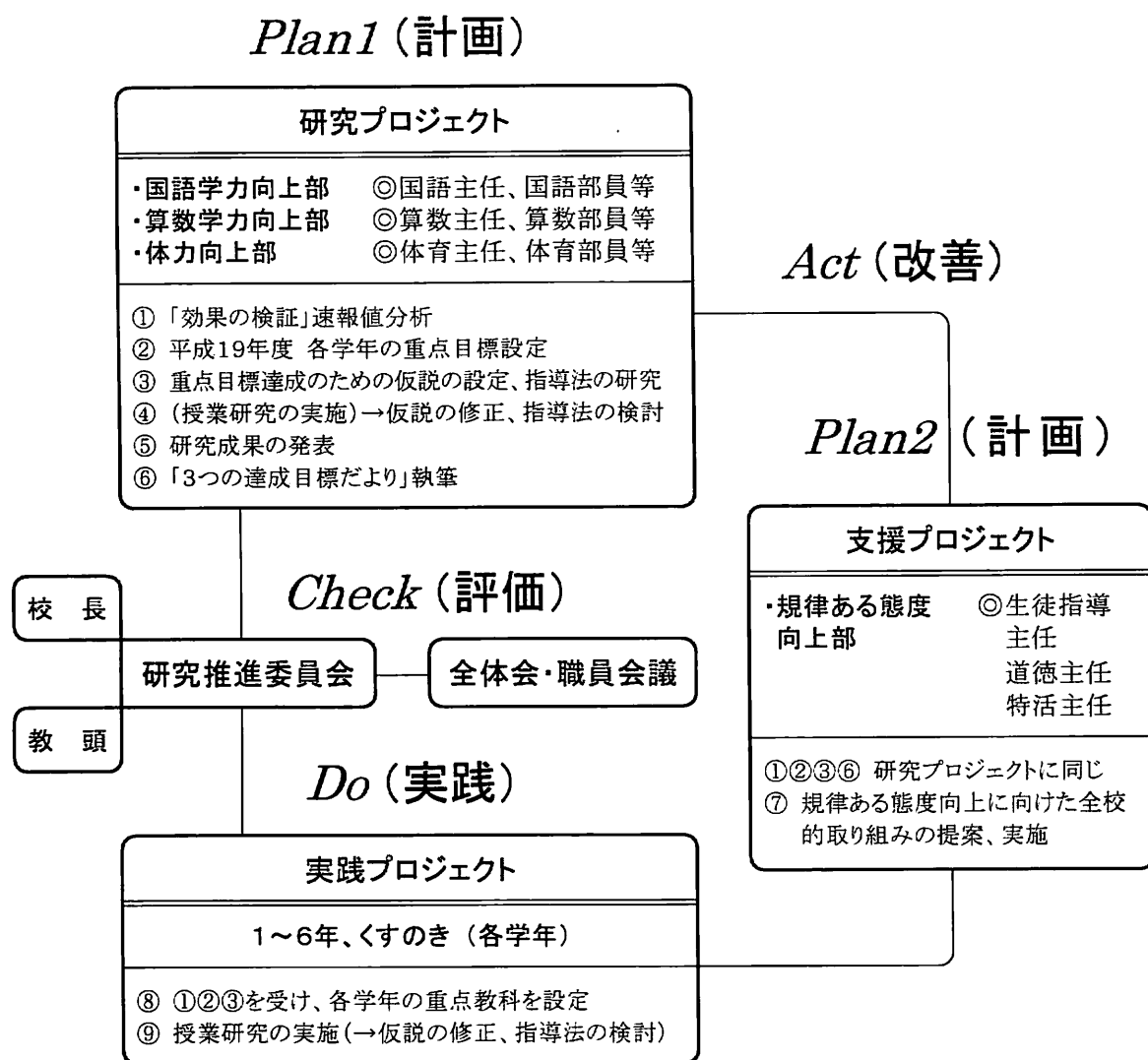
仮説A 分かる授業の実践

- ◆一人一人の児童が、「できる」「分かる」を実感できる授業を行うことが、「生きる力」を育むことにつながるだろう。

仮説B 地域との連携融合

- ◆開かれた学校づくりを一層推進することが、家庭や地域の信頼を獲得し、「生きる力」を育む教育の充実につながるだろう。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究の経過 ※「研究」(研究プロジェクト)、「実践」(実践プロジェクト)、「支援」(支援プロジェクト)

4月23日	全体会、研究(速報値分析)、研推委	11月26日	研究・実践(紀要、指導案作成)
5月17日	研究(重点目標・仮説設定)	12月13日	発表会準備
5月28日	研究(指導法の研究)、研推委	1月17日	発表会準備
6月14日	研究(指導法の研究)	1月21日	発表会準備
6月25日	実践(教材研究)、支援、研推委	2月1日	委嘱学校研究発表会
7月5日	全体会(授業研究会①国語4年)	2月7日	全体会(発表会の反省)
9月13日	全体会(授業研究会②体育6年)	2月14日	研推委
10月17日	全体会(授業研究会③算数2年)	2月25日	研推委
10月22日	研究・実践(紀要、指導案作成)	3月13日	全体会(次年度研修計画検討)
11月15日	研究・実践(紀要、指導案作成)		

※夏季休業中は8日間の研修日を設定し、示範授業、実技研修等を実施した。

(2) 研究の構想

◆学校教育目標の具現化 *かしこく・ゆたかに・たくましく*

目指す児童像

かしこく ○自ら学び、基礎学力を身に付けることができる子ども
ゆたかに ○相手のことを考え、誰ともなかよくできる子ども
たくましく ○心も体も健康で、粘り強く最後までやりぬく子ども

目指す学校像

〈ミッション〉

創造・先進・士気・実践・連携・期待

- ①基礎学力をもとに[生きる力]を育み、自らの可能性を実感できる児童を育成する学校
- ②保護者や地域の願いを共有し、地域の教育力を生かして[生きる力]を育む学校

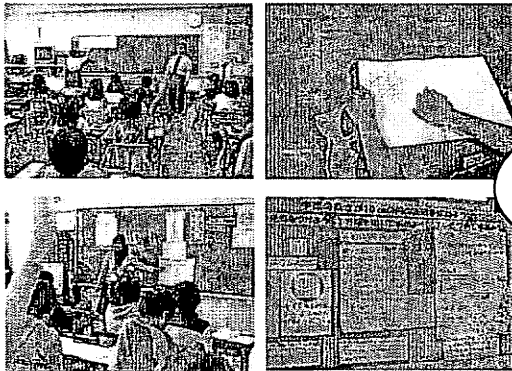
- 学力向上カルテ、振り返りカードの活用等、指導と評価の工夫・改善
- 少人数指導の充実
- 家庭・地域・学校が一体となった「生きる力」の育成

平成18年度

平成19年度

- 国語・算数・体育を中心として、「できる」「分かる」を実感できる授業→3つの達成目標の推進
- 学習を支える規律ある態度、道徳的実践力の向上
- 家庭・地域・学校が一体となった「生きる力」の育成

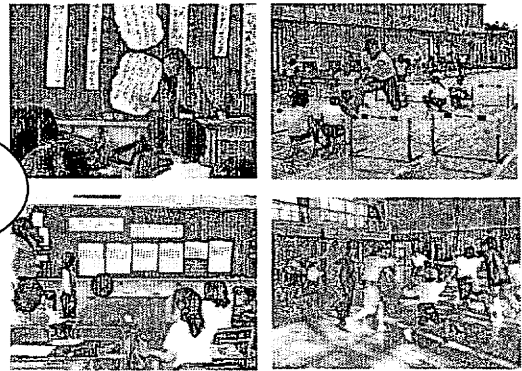
算数科を中心として



【生きる力】

- ① 自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力
- ② 自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性
- ③ たくましく生きるための健康や体力

国語科・算数科・体育科を中心として



「教育に関する3つの達成目標」の実践

- ◆「読む」「書く」「計算」の領域を中心とした基礎的・基本的内容を、子どもたち一人一人に確実に身に付けさせるため、指導と評価の工夫・改善を図る。
- ◆子どもたち一人一人に、社会の一員として守らなければならないきまりや行動の仕方を身に付けさせ、規律ある態度、道徳的実践力の向上を目指す。
- ◆授業や業前運動等の時間を通じて、子どもたち一人一人が設定する「体力向上目標値」の実現を目指す。

授業実践

児童一人一人の自己実現

仮説A 分かる授業の実践

◆一人一人の児童が、「できる」「分かる」を実感できる授業を行うことが、「生きる力」を育むことにつながるだろう。

仮説B 地域との連携融合

◆開かれた学校づくりを一層推進することが、家庭や地域の信頼を獲得し、「生きる力」を育む教育の充実につながるだろう。

平成18・19年度 研究主題
子どもたち一人一人に「生きる力」を育む教育の推進
 —「教育に関する3つの達成目標」の実践を通して—

3 実践事例

(1) 国語・算数・体育を中心とした授業実践

授 業 実 践	「教育に関する3つの達成目標」 との関わり
<p>■平成19年7月5日(木)第4学年4組 国語《本と友達になろう「白いぼうし」》 ○指導者 元群馬大学教授</p>	<p>聞いている人に、場面の様子がよく分かるように声に出して読むことができるようにしましょう。</p>
<p>■平成19年9月13日(木)第6学年1組 体育《ハードル走(陸上運動)》 ○指導者 川越市教育委員会指導主事</p>	<p>走力を高める。 (敏捷性・柔軟性)</p>
<p>■平成19年10月17日(水)第2学年1組 算数《九九をつくろう(かけ算2)》 ○指導者 川越市教育委員会指導主事</p>	<p>かけ算九九ができるように しましょう。</p>
<p>■平成19年11月26日(月)くすのき1・2組 体育《にんじゃひろばへいこう(基本の運動)》 ○指導者 埼玉県立川越養護学校教諭</p>	<p>走力を高める。 (敏捷性・柔軟性)</p>

(2) 規律ある態度の育成

① あいさつ運動の取り組み

「進んであいさつや返事をする」は、望ましい人間関係をつくる上でとても大切なことである。そこで、児童会を中心にあいさつ運動を行っている。また、教職員が校門に立ち、登校をしてくる児童にあいさつをして、一日の始まりを大切にしている。

② わすれものゼロさくせん

忘れ物をしないようにすることは、確かな学力を身に付ける第一歩である。そこで、「わすれものゼロさくせん」という合い言葉のもと、点検カードを活用したり学級活動で話し合ったりして、子どもたちの自覚をうながすとともに、家庭の協力を得ながら取り組んでいる。

4 研究の成果と課題

授業実践を通して、指導と評価の工夫改善を図るとともに、各教科において、日々継続的な取り組みを行ってきた。その結果、子どもたちの主体的な学びの態度や学習意欲の向上が見られるようになった。また、「あいさつ運動」や「わすれものゼロさくせん」等の取り組みは、学習ルールの確立につながった。しかし、子どもたち一人一人の学習状況の的確な把握のため、より望ましい手立てを工夫すること、また、既習内容の確実な定着を図り、活用の力を高めることなど、課題も残る。

今後とも、保護者、地域と一丸となって、「子どもたち一人一人に[生きる力]を育む教育の推進」に取り組んでいきたいと思う。

「豊かな学びを育む授業の創造」

－指導方法の工夫・改善を目指して－

川越市立霞ヶ関北小学校

研究のポイント

- 基礎・基本の確実な定着を図り、学び方を学び、学んだことを活かして課題解決できる児童の育成。
- 授業における児童相互の関わり合いを通じたコミュニケーション能力の育成。
- 指導と評価の一体化による個に応じた学習指導の展開。

1 研究の概要

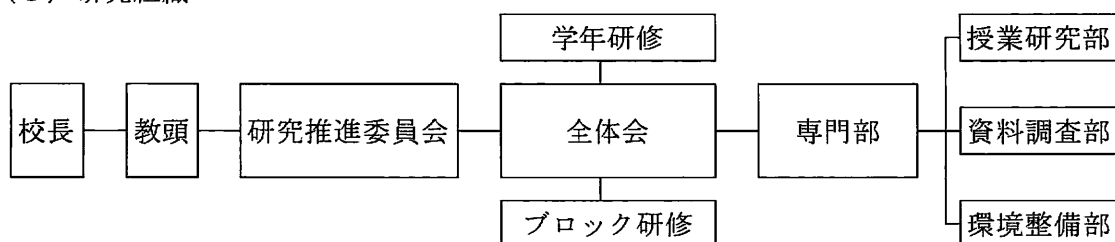
(1) 研究のねらい

本校では、「豊かな学び」を「自分の考えや思いをもち、相手に伝え聞き、自分の考えや思いを深め、共に高め合う学び」ととらえている。本研究では、授業における児童相互の関わり合いを通して、学んだことを活かすことができる子、教え合い高め合うことができる子、自分の成長を評価できる子を育成することをねらいとした。

(2) 研究主題設定理由

本校は、これまでの「学びのよさを味わえる子どもの育成」の取組を通して、児童に、標準学力検査・入間地区学力調査・教育に関する3つの達成目標検証結果において各項目で平均を上回るなど基礎学力の定着が図られてきた。また、授業での活動の様子を見ると、既習事項を活かして自力解決する力も伸びてきている。そこで、さらに研究を継続し、児童が相互の関わり合いの中で、活発に教え合ったり学び合ったりすることを通して、人間関係を深めながら学べる力を伸ばし、児童の生きる力の醸成を図っていきたいと考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究仮説

① 課題解決能力の育成

個に応じたきめ細やかな指導を行い、基礎・基本の定着を図れば、課題解決能力が育成され、豊かな学びが育まれるであろう。

② 自己評価能力の育成

教師が一人一人に応じた適切な評価をしたり、自己評価、相互評価を充実させたりすれば、自己評価能力が育成され、豊かな学びが育まれるであろう。

③ コミュニケーション能力の育成

授業の中で、教育相談的手法を取り入れ、関わり合っただり、教え合ったりする経験を積み重ねれば、コミュニケーション能力が育成され、豊かな学びが育まれるであろう。

(2) 専門部の取組

① 授業研究部

ア 課題解決能力の育成に向けて

(ア) 教材や学習内容に合わせたコース別学習

興味・関心別や習熟の程度に応じたコースを設定したり、等分割の少人数にして個やグループ指導に対応したりするなどして、教材や学習内容に合わせた少人数指導を行った。また、課題解決のプロセスを踏んだコース別の授業では、コース別に学習の手引きを作成したり、解決のポイントを示したりして自力解決ができるようにした。

(イ) 基礎・基本の定着

課題解決の思考過程が分かるように、学年の発達段階に応じたノート指導やワークシートの活用を行った。また、それを分析しコメントをつけて評価することで、次時への学習へ生かせるようにした。さらに、学年掲示板等を利用し、既習事項を履歴として掲示したり、関連・発展問題を掲示したりすることで学んだことを生かす力を付けた。

イ 自己評価能力の育成に向けて

(ア) 児童一人一人のよさや課題の把握と評価の累積

児童の学習感想にコメントを書くことにより一人一人のよさや課題を把握した。また、よい感想を児童に紹介し他の児童に広めながら、学習の成果や課題を振り返ることができる力を高めていった。さらに、児童のつまずきを予想し、支援方法を具体的に準備した。

(イ) 自己評価・相互評価の機会の設定とその累積

毎時間、学習の振り返りを行い、ノートや振り返りカードに学習感想を書いた。自分の学びを見つめるだけでなく、他の児童との学び合いの中での相互評価も行うことができるようにした。さらに、コース別学習では、学習診断テストや教師のアドバイスにより、自分に適したコースを選択できる能力を育成した。

ウ コミュニケーション能力の育成に向けて

(ア) 発達段階に応じた学習の手引きの作成

広げ合いや深め合いにつながる話し合いができるように、発達段階に応じた「学習の手引き」を作成した。

(イ) 学年に応じた意図的・計画的な交流場面の設定

低学年では、「ペアによる話し合い」を取り入れ、友達の考えを聞き、自分の考えと比べることにより、新たな考えに気付くことができるようにした。中・高学年では、「グループによる話し合い」を取り入れ、考えを広げ合い、深め合うことができるようにした。

(ク) 「社会性を育むための霞北小プログラム」の作成

コミュニケーション能力を育成するには、「言葉で友だちと共感的に関わる」ことが大切である。具体的には、自分の考えを友だちに伝え、友だちの考えを受け入れ、互いに積極的に関わり合おうとすることであるととらえている。そこで、本校では全学級で言葉のアンケートをとり、社会性を育むための具体的活動内容を示した霞北小プログラムを作成した。

② 資料調査部

ア アンケートによる実態把握

児童一人一人の実態を把握し、個に応じた適切な指導を行うために、国語科・算数科における情意面（2教科についての印象、コース別学習についての印象）のアンケートを行った。アンケートは、2回実施し、児童の変容を検証した。

イ 標準学力検査、入間地区学力調査、教育に関する3つの達成目標検証結果の分析

各学年とも、平均を上回っている領域が多い。平均を下回っている領域については、指導の手立ての検討を行った。

③ 環境整備部

ア 国語コーナーの設置

国語に関する興味・関心を高めるとともに、学んだことを楽しみながら確認できる「国語コーナー」を設置した。発達段階に応じ、クイズ形式にしたり、視覚的に親しみやすくしたりして、計画的に内容の更新を行った。

イ 校内LANの活用

コンピュータハードディスク内にフォルダを作成し、各学年で作成した自作テストや授業で使用したワークシート等を、継続的に保存し、活用を図るようにした。

ウ 教育相談部との連携

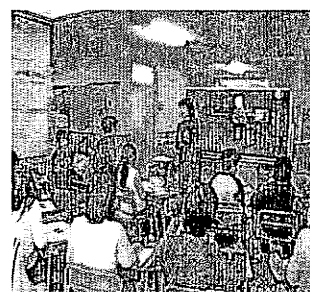
教育相談部と連携し、好ましい人間関係の育成を図るため、「友だちに言われてうれしい言葉」の掲示物を、各学年で作成した。

3 実践事例（第5学年 国語科「わらぐつの中の神様」）

(1) 課題解決能力の育成に向けて

児童が課題解決に意欲的に取り組む中で、個に応じた指導をより一層充実させ、一人一人の児童に読む力を確実に定着させるために、等分割のコースによる少人数指導を行った。

場面の様子や登場人物の心情を読み取っていく際には、児童の一読後の感想をもとに課題を設定し、読みの視点をはっきりさせて読み取らせていった。また、読むことを苦手とする児童を中心に、視点を与えたり、読み方の一例を示したりするなど具体的な支援を行っていくようにした。さらに、板書の仕方を工夫し、読むことを苦手とする児童にも理解できるように、言葉でとらえたイメージを視覚的に表す板書にしていた。



(2) 自己評価能力の育成に向けて

本単元の指導にあたっては、個に応じたきめ細かな支援を行っていくために、授業中

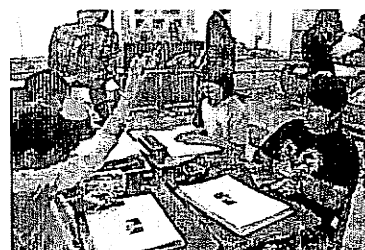
の児童の様子や書かれたワークシートの記述内容などを通して、各教師が児童一人一人のよさや課題を的確に把握し、毎時間の評価を蓄積していくようにした。

また、学習のめあてを、あらかじめ児童に提示することにより、見通しをもって学習活動に取り組めるようにしていった。さらに、毎時間、授業の終末段階に、自分の学びを振り返る時間を設定し、成果と課題を明らかにするとともに、次時の学習への意欲につなげるようにした。



(3) コミュニケーション能力の育成に向けて

コミュニケーション能力の育成に向けて、本単元の指導では、場面の様子や登場人物の心情を読み取っていく際に、グループで関わり合っただり、教え合ったりする場面を意図的に設定した。毎時間、各自が課題解決に向けてワークシートにまとめた自分の考えと友達の考えを比較検討させることにより、自分の読みや考えの深まりを実感させた。その際、話し合いの進め方の手引きを配布しておき、それを手がかりに、司会を介して円滑にコミュニケーションがとれるようにし、深め合いや広げ合いができるようにした。



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- コース別学習によるきめ細やかな指導や既習事項の掲示等の活用により、児童が前時までに学習した方法を意識しながら新しい課題に取り組むなど、課題解決能力が育成されてきた。
- 教師による一人一人に応じた適切な評価、児童の自己評価、相互評価の充実等により、学習のまとめが書けるようになるなど、自己評価能力が高まってきた。また、教師はそれをもとに、児童一人一人のよさや課題を的確に把握し、個に応じた指導を行うことができた。
- 話し合いをする際に、教師が「学習の手引き」を用意し、模範を示したことにより、児童が明確なイメージをもって学習活動に取り組み、相互交流による学習を通して、主体的に学ぶことができるようになった。
- 授業の中で、意図的計画的に友達同士で交流する時間を設定したことにより、友達の多様な考え方にふれ、自分の考えを広げたり、深めたりするなど、豊かな学びの育成が図られてきた。

(2) 課題

- 習熟の程度に応じたコースごとの「学習の手引き」の工夫改善等、個に応じた指導をさらに充実させる。
- 教師の言葉がけと児童の反応についての研究等、効果的な支援をより充実させる。
- 発達段階に応じたコミュニケーション能力の育成を図る。
- 「客観性・妥当性」の高い具体的な評価規準を検討し、活用を図る。

研究主題

「実践的コミュニケーション能力育成のための基礎・基本の定着」

－ A Balanced Activities Approach の実践を通して－

川越市立川越第一中学校

研究のポイント

- ・実践的コミュニケーション能力を具体的にとらえ直し、その基礎・基本となるものは何かまた、その基礎・基本をどのように定着させていくかについて研究を行う。
- ・日々の実践から指導法や教材等を工夫し、研究主題に迫れるような研究を行う。
- ・言語活動や実践的コミュニケーション活動に対しての評価を工夫し、指導と評価の一体化が図れるよう研究を行う。

1 研究の構想

(1) 研究のねらい

① 実践的コミュニケーション能力とは

英語の語彙や文型文法事項について十分理解し、知識をもっているだけでなく、コミュニケーションの道具として活用できる能力をもっていることが、英語の実践的コミュニケーション能力を備えているということになる。本校では、この実践的コミュニケーション能力を具体的にとらえなおし、「日常生活のさまざまな場面において、英語を使って自分の意見、考え、情報などを伝えたり、受け取ったりできる能力」としている。

② 実践的コミュニケーション能力育成のための基礎・基本とは

実践的コミュニケーション能力育成のための基礎・基本とは、「知識として身に付けた発音、語彙、文型・文法事項などが統合され、コミュニケーションが可能となる力とコミュニケーションを図ろうとする態度が身に付くこと」である。本校では、これを評価の観点に照らして整理し、次のように具体化した。

- ① コミュニケーションに関心を持ち、積極的に言語を理解したり言語活動に取り組もうとする態度を持つこと [関心・意欲・態度]
- ② 基本的な語・句・文を用いて自分が伝えたいことを英語で話したり書いたりすることができること [表現の能力]
- ③ 基本的な語・句・文で表現された英語を、聞いたり読んだりして、相手の伝えたいことを理解することができること [理解の能力]
- ④ 英語という言語の特性を知り、語や句の意味や使い方を理解することができること [言語・文化の知識・理解]

③ 研究の仮説

母国語であれ外国語であれ、言語の習得は、いずれも十分な **comprehensive input** (包括的な言語入力) が前提となる。はじめに膨大な量の言語入力を得て、やがてそれを模倣し、言語出力が繰り返されることで言語の習得は成功するのである。したがって本校では、

実践的コミュニケーション能力の育成についても、**comprehensive input** を重視するとともに、同時に言語出力の場として、**practice output** (理解力と表現力の一体化を目指す言語活動) 及び **communicative output** (コミュニケーション活動) の二段階を考え、活動の balance (均衡) を図って指導に当たっている。これは Jeremy Harmer が、その著書 *The Practice of English Language Teaching* で提唱する A balanced activities approach の考え方を取り入れたものである。

こうした考え方に立って、本校では 実践的コミュニケーション能力育成のための基礎・基本の定着を図るために、以下の仮説を設定した。

十分な **comprehensive input** (包括的な言語入力) を行うとともに、**practice output** (理解力と表現力の一体化を目指す活動) をベースとして、実際の **communicative output** (コミュニケーション活動) を計画的に展開し、併せて適切な評価を行えば、実践的コミュニケーション能力育成のための基礎・基本の定着が図れる。

(2) 研究主題設定理由

① 社会的要請との関連

本校では、現代の社会的要請や学習指導要領の目標を踏まえ、特に中学校段階におけるコミュニケーション能力育成の観点から、実践的コミュニケーション能力の基礎・基本の定着をいかに図るかを検証すべく本主題を設定した。

② 本校の学校教育目標との関連

本校の教育目標は「自主・練磨・敬愛」である。言語の習得には、コミュニケーション活動に自主的に取り組む姿勢や人間が創造した言語という文化に対する敬愛の気持ちを育てることが必要である。また、言語の習得段階では、互いに切磋琢磨し、協力しながら楽しく学習する雰囲気をつくりあげることも重要である。したがって実践的コミュニケーション能力の基礎・基本を身に付ける過程は、とりもなおさず本校教育目標の達成にも寄与するものである。

③ 本校生徒の実態との関連

本校生徒全体の英語学力は、川越市全体の平均を常に上回っており、ここ数年、この傾向に変化はない。「実際に英語が使えるようになりたい」という思いと現実の実践的コミュニケーション能力とのギャップを埋めていくことが大きな課題となっている。このような本校生徒の実態を踏まえ、コミュニケーション能力の課題を解決するため本主題を設定した。

2 研究の内容

① 理解力と表現力の一体化を目指す言語活動の工夫

理解力と表現力の一体化とは、「発音、語彙、文型などを理解していく過程で、それらが実際に表現する力となって生きて働くようにすること、すなわち理解力と表現力が一体化し、運用力まで高める」ことといえる。

② 学習への意欲を高める実践的コミュニケーション活動の創造

本校で定義する言語活動は、音声や語彙、文型・文法事項の定着を図り、理解力と表現力の一体化を目指す活動である。一方、さまざまな場面において、集団の中でお互いが自分の意見、考え、情報などを伝えたり、受け取ったりする活動、メッセージの授受が前提となる言語活動を実践的コミュニケーション活動と呼んでいる。岡山大学教授松畑熙一氏は、この活動を次の二つに分類している。

A Task 遂行を基盤としたコミュニケーション活動

B メッセージを中心にして発話意図と言語表現が一体化したコミュニケーション活動
いずれも理解力と表現力の一体化を目指す言語活動をベースとして行われるもので、可能なかぎり authentic な場面を設定し、生徒の活動意欲を高める活動の工夫が求められる。

3 実践事例

(1) Task 遂行を基盤としたコミュニケーション活動

第2学年の実践

ア テーマ 「STEP UP CARD」

イ 学習ステージ consolidation (まとめ)

ウ 定着を目指す文型・文法事項 既習の文型・文法事項

エ 準備するもの ・STEP UP CARD (生徒と教師の対話カード)

オ 実施方法

- ・毎授業の最後(終了5分前)に行う。
- ・自由に英文を書く。
- ・書く内容がない生徒にはテーマ(題)を与える。
(例:昨日は何をしていましたか? 明日は何をする予定ですか?等)
- ・生徒が書いたものに教師がコメントをつけて返却する。

(2) メッセージを中心にして発話意図と言語表現が一体化したコミュニケーション活動

第1学年の実践

ア テーマ 「にゃんだこれ??」

イ 学習ステージ communicative output (コミュニケーション活動)

ウ 定着を目指す文型・文法事項 疑問詞 what の使い方

エ 実施方法

- ・時間を決めて各自で絵を描く。
- ・一目でわからないよう工夫する。
- ・ペアを組んで自分の描いた絵を見せながら会話を行う。

<例>

A: Is this a mountain?

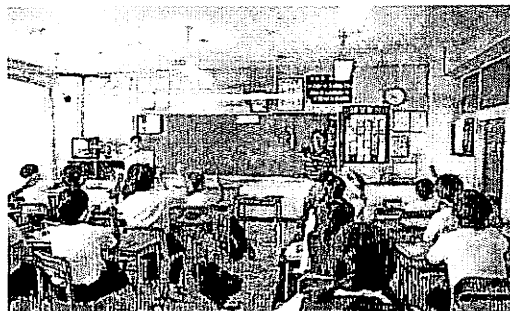
B: No, it isn't. (A gives more hints to B.)

A: Is this a rabbit?

B: No, it isn't. (A gives more hints to B.)

A: What's this?

B: It's a cat.



4 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

① 指導方法の工夫・改善の視点から

実践の中での成果として次の2点が挙げられる。1点目は、それぞれの教師が独自で行っていた指導法を持ち寄り、研究協議を重ねていくことで指導法の工夫、改善や共有化を図ることができた。このことにより、学年ごとの指導から3年間を見通した計画的、継続的な指導計画を作成することができた。2点目は、研究授業を通して研究仮説に近づくための手立てや活動を工夫し、それに対し多くの指導者の先生方から指導を受けることができた。指導を受けたことで、これまでの自分達の授業を振り返り、問題点や改善点に気づき、指導力の向上を図ることができた。

② 標準学力検査や意識調査の結果から

毎年6月に市内中学校が実施している教研式標準学力検査の結果で比較してみると、本年度2年生の英語学力の平均は、昨年度2年生よりも偏差値で2.2ポイント上昇している。また、3年生について同様の比較をすると、0.1ポイント上昇している。特に、4～5段階の上位レベルが47%から54%に増加している。

次に、毎年12月に実施する本校独自の「授業への取り組みに関する調査」では、昨年12月実施した調査をもとに分析すると、1年生（現2年生）および3年生（現高1生）は、前年度に比べ、①授業が分かる、②授業が楽しい、③授業に積極的に取り組んでいる、のいずれの項目においても上回り、学習意欲の向上がうかがえる。また、2年生（現3年生）については、授業の楽しさは下回ったものの、授業の理解度は上回っている。こうしたことから本研究が生徒の学習意欲や学習理解度の向上により影響を与えていることがうかがえる。

③ 生徒の変容の姿から

このような実践を行っていく中で、生徒の実態にも変化が現れてきた様に感じる。生徒の意識調査アンケートにおいても約75%程度の生徒が授業を楽しく積極的に取り組んでいると答えており、生徒の学習意欲の向上がわかる。基礎・基本である新出文型定着のためのパターンプラクティスやより実践に近い状況を設定したコミュニケーション活動では基本の例文の練習にとどまらず、自分の考えや思いを相手に伝え、相手の意見を理解しようとする意欲的に取り組めるようになってきた。

(2) 今後の課題

研究期間も短く、実証的な研究のスタイルが取れなかったことから、実践的コミュニケーション能力育成のための基礎・基本が定着したかどうか、十分な検証ができたとは言えない面がある。今後は、精細な研究計画のもと、データを蓄積し、研究の質と実証性を高めていきたい。以下、今後の課題となるものを列挙する。

- (1) これまでの研究成果を整理した上でのより実証的な研究の推進
- (2) 実践的コミュニケーション能力を測定する Performance Test の工夫・改善
- (3) コミュニケーション能力の基礎が確実に身に付く指導過程の工夫・改善
- (4) 生徒が意欲的にコミュニケーション活動に取り組む授業の創意工夫
- (5) コミュニケーション能力向上を目指す更なる教材の開発

「主体的に生きる力を身に付ける児童の育成」

— 思考力を高めるためのコミュニケーション能力の育成をめざして —

川越市立月越小学校

研究のポイント

- 基礎基本を確実に身に付けさせ、確かな学力の定着を図るために単元構想図を活用した授業改善
- 思考力を高めるためのコミュニケーション能力の育成場面を評価する具体的な手だて
- 学習規律及び日常生活と学力の関連を探るためのアンケートの実施

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

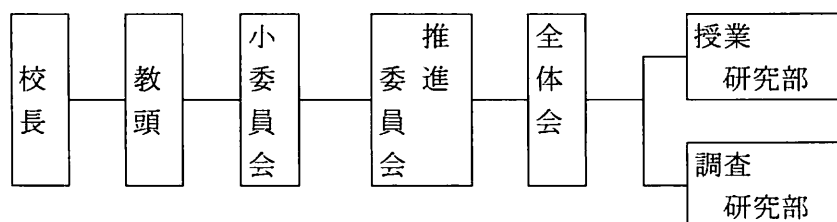
学校教育目標『自ら学び、明るく、生きぬく子』の教育を基本として、すべての教育活動を通して「出会い、ふれあい、高めあい」を合い言葉に研究を進めている。そのなかで、一人一人のコミュニケーション能力を伸ばし、自ら考え正しく判断し行動できる児童を育成するための教育活動を推進することが急務である。その手だてとして、確かな学力の定着を図り、思考力が高まるような学習指導の工夫改善に取り組むこととした。また、個々の児童のコミュニケーション能力の高まりを的確に評価し、指導に生かす方法についても研究していく。さらに、学習の約束やきまり、生活のきまりやマナーなどの基本的な生活習慣の充実を図ることも研究のねらいとしている。

(2) 研究主題設定理由

本校の児童は、概ね素直で元気がよいが、生活全般で考え方や物事のとらえ方が幼い。また、学習を主体的に進めたり、自分の思いや考えを表現したりする力が不十分である。特に、自分の考えを振り返ったり、友達の話聞いて自分の考えを広めたり深めたりせず、安易に結論を出したがる傾向がある。学習の中で、しっかりと話を聞き、じっくりと自分の考えを練り上げる場が必要と考える。その場がコミュニケーションの場だと考えた。

そこで、コミュニケーション能力を「会話する力」だけでなく、「自らの考えを高めていく力」ととらえ、学習指導の中で、①課題に対して解決の方法など自分の考えをもつことができるようにすること。②人との交流によって自分の考えをよりよいものにしていく力を身に付けさせることをねらいとした授業展開を図る必要がある。また、③基本的な生活習慣を身に付けることによって、学習や生活に意欲がもてるようにすることも大切なことと考えた。つまり、学習過程での意欲をもった学び合い、教え合いを大切にした授業を確立するために本主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 授業研究部の取り組み

授業研究をするなかで、下記の項目に取り組んだ。

- ①授業によって伸ばす思考力を高めるためのコミュニケーション能力の評価と具体的な評価方法
- ②当該学年を中心とした授業の計画・立案
- ③授業によって養われるコミュニケーション能力の洗い出し
- ④授業研究会の役割分担
- ⑤授業研究後の記録整理と反省

(2) 調査研究部の取り組み

児童の実態を把握するために以下の内容で、アンケート調査を行った。

- ①学習に関して ②生活に関して ③社会性について

この調査は、保護者の立場から、児童の立場から、教師の立場からとった。その結果、

①に関しては、4教科より図工、体育が好きと答える児童が多く、理解したり、考えたりすることが好きではないように感じられた。

②に関しては、基本的な生活習慣が身に付いていない児童が多く、朝起きる時間がまちまちであったり、寝る時間が遅かったり、歯磨きや洗顔をしない児童がいたり様々であった。

③に関しては、友達とのかかわり方がうまくいかなかったり、親子関係がうまくいっていなかったりとコミュニケーションの取り方がうまくいっていない児童もいた。

このアンケート結果から調査研究部は、子どもたちの基本的な生活習慣の確立をめざして三つのグループに分けて、実践してきた。

(学習に関してと社会性については、授業研究部で計画、実施)

3 実践事例

(1) 研究授業と研究協議 【授業研究部】

5学年 算数 「四角形をつくろう」

指導者 川越市教育委員会 指導主事

・算数の学習において、コミュニケーションするのに必要な能力

- ①問題場面を図に表す
- ②数量の関係を図、表、グラフに表す
- ③数量の関係を式に表す
- ④自分の考えを論理的に説明する（言葉に表す）
- ⑤友だちの表した図、表、グラフ、式をよみとる
- ⑥友だちの説明を理解する（説明できる）
- ⑦わからないことを質問できる

・思考力を高めるためのコミュニケーション活動

自力解決における表現活動の場の設定、個に応じた指導
話し合い活動の充実 自分の考えと友だちの考えの比較
明瞭、簡潔、一般性などの観点からよりよい考え方へ検討

- | |
|-------------------|
| ①抽象度の低いものから高いもの |
| ②まわりくどい方法から簡潔な方法へ |
| ③一般性の低いものから高いものへ |

3学年 理科 「太陽の光でしらべよう」

・単元構想図を作成し、光のリレーをするという興味、関心をもって実験できる授業展開であった。

・思考力を高めるためのコミュニケーション能力がただ単なる「話し合い活動」ではないこ

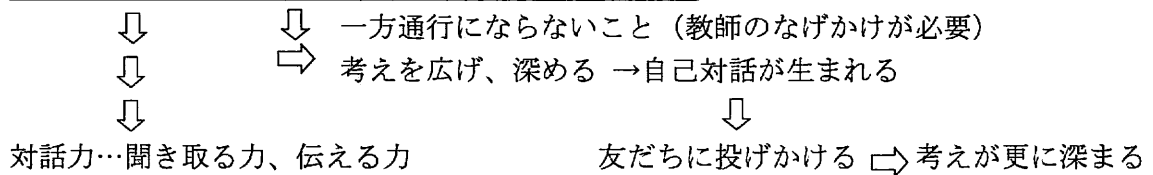
- とを示した。 (☐) は、思考力を高めるためのコミュニケーション能力を表す)
- ①光が進む方向を考えながら(光のリレー)方法話し合う。…☐ 話す、発想、類推
 - ②実験の方法を試行錯誤しながら、グループ活動する。…☐ 協力
 - ③教師の支援によって活動がどう変わったか。…☐ 聞く
 - ④各グループの結果を発表し、自分たちの結果が正しかったか自己評価する。…☐ 検討、評価、認識

5 学年 社会「わたしたちの生活と工業生産」

指導者 川越市教育委員会 指導主事

- ・指導要領に「調べる」がたくさんでてきたため、調べっぱなしが多くなり、次に「まとめる」がでてきて、新聞づくりが多くなった。今、「考える」に注目されている。考えるためには、「情報」が入ってこなければならない。そのために、コミュニケーションが必要となる。

- ・資料との対話・児童と教師との対話・児童同士の対話



1 学年 国語「ずうっと、ずっと、大すきだよ」

指導者 川越市教育委員会 指導主事

- ・学習規律とコミュニケーション能力との関係 ・人の話をしっかりと聞く=根本話し手を見て聞く→うなずきながら聞く→声をだして(スキルの指導も必要)
- ・コミュニケーション能力の育成について
グループの活動では、自分の書いたものを声に出して読む→Face to Face「話し合い」のねらいは、自分の考えを深めたり、広げたりすること→時間を確保すること
1年生の段階では、簡単な質問ができたり、感想が言えればよい。
「話し合い」のスキルアップのポイントをおさえて、系統的、継続的に指導していく。

(2) 基本的生活習慣の確立をめざした実践 【調査研究部】

① アンケート調査部

学力の向上と規則正しい生活習慣との間には相関関係があるのではないかと考え、アンケートの回答から、各学年の児童の生活習慣について全教師で分析を行い、現状の傾向と課題を捉えた。さらに学力テストの結果と付合わせることで、学力と規則正しい生活習慣の相関関係についての検証を行った。その結果、学力と生活習慣の間でははっきりした相関関係を捉えることができなかった。

資料 1

質 問	上 位					下 位				
	児童名①	児童名②	児童名③	児童名④	児童名⑤	児童名①	児童名②	児童名③	児童名④	児童名⑤
1 いつも朝は何時に起きますか										
2 朝食は毎日食べていますか										
3 朝食は家を出るどれくらい前に食べていますか										
4 学校に持っていくものを自分で確かめていますか										
5 毎朝顔を洗っていますか										
6 毎朝歯を磨いていますか										

児童の中には、起床後、朝食を食べてこなかったり、洗顔、歯磨きの習慣が身についていなかったりする児童が見られた。

そこで児童全員に「生活リズムがんばり表」を2回実施した。理想的な生活リズムをもとに、個々の生活リズム表を作成しチェックを親子で行った。その結果、児童の生活に変化が見られるようになった。一日の生活を意識しながら生活するようになってきた。

また、歯磨きや洗顔も習慣化が図れるようになってきている。

冬休みの歯磨きチェックでは、ほとんどの児童が歯磨きを朝、昼、晩とやるようになった。

③ 学級指導部

児童の基本的な生活習慣の必要性を理解させるため、重点目標を月毎に決めて指導を行った。まずは、洗顔と歯磨きの指導を朝会を使って全校児童に指導した。その後給食後の歯磨きを音楽に合わせて一斉に行うようにした。次に睡眠の大切さについて学級指導を行い、「寝る子は育つ表」を家庭の協力を得ながら実施した。その結果、歯磨きの大切さ、睡眠の大切さが少しではあるが児童に浸透してきたように思われる。また、アンケートを家庭で実施することにより意識化が図られてきた。

4 研究の成果と課題

- ・今まであった学習規律を再度、しっかり実践するようになった。(授業の開始、終了の挨拶のしかた、発表のしかた、話の聞き方)特に、月ごとに重点を決めて学校全体で徹底を図るようにした。(聞く姿勢=手はひざ、話す人を見て、最後まで静かに聞く)
- ・思考力を高めるためのコミュニケーション能力は、まず各教科のねらいに迫る授業展開をすることが基本であり、個を育てることから始まることの確認ができた。
- ・「話し合い活動」は、思考力を高めるためのコミュニケーション能力に不可欠な面もあるため、「話し合いのてびき」等を作成しスキルの指導が必要である。
- ・評価の部分がまだ明確ではないが、その授業のねらいが達成されればよいと考えられるので、指導案に示す☐と合わせて、具体的な評価をしていきたい。
- ・全教科を通じて研究を行っていきけるよさがあると同時に、研究の成果をはっきり示すためには、教科を絞るべきか思案中である。
- ・学力と生活習慣の相関関係が見られなかったのは、自己評価による点数でもあったので、正しい調査結果が得られたとは考えにくい。したがって、今後は調査の方法を検討してさらに児童の実態を把握することに努めたい。
- ・『生活リズムがんばり表』を活用することにより、個々の生活の帯を理想的な生活の帯に近づけようと努力する児童が多くなってきている。引き続き第3回目のがんばり表を行い、児童一人一人に自分の生活リズムの定着に努めていきたい。
- ・基本的な生活習慣を見直し、身に付けていきたい部分を月の重点目標とした結果、継続して実行していく意味や大切さを少しずつではあるが理解し、意識していこうとする様子が見られるようになった。今後も本校児童の実態を把握し、重点をおいた学級指導が進められるように努めていきたい。

生活リズムがんばり表

年 組 なまえ

①理想的な生活リズム (例)

起きる時間 (6:30)	朝ごはん (7:00)	排 便	学 校	おどろきの 朝の運動 (7:30)	テレビゲーム の時間 (8:00)	夜ごはん (6:30)	お風呂 (8:30)	ハミガキ (9:00)
洗顔	ハミガキ							

②毎日の生活リズム

起きる時間 (:)	朝ごはん (:)	排 便	学 校	おどろきの 朝の運動 (:)	テレビゲーム の時間 (:)	夜ごはん (:)	お風呂 (:)	ハミガキ (:)
洗顔	ハミガキ							

※小学生の睡眠時間は9～10時間です

日 付	洗 顔	朝 ご は ん	排 便	学 校	友だちと の遊び 運動	テレビ の時間 ましたか	ゲームを 何時間や りましたか	夜 ご は ん	お ふ ろ	ハ ミ ガ キ
11/21 (水)				(○)(○)(○)						
11/22				(○)(○)(○)						

「学ぶ喜び 笑顔輝く 高北っ子」

—豊かに学び合う算数科の学習活動を通して—

川越市立高階北小学校

— 研究のポイント —

- (1) できる喜びを味わわせる個に応じた指導の充実
 - ①効果的な少人数指導法
 - ②個に応じた指導と評価の工夫
- (2) さらに、高め合う喜びを味わわせる練り上げ活動の工夫
 - ①練り上げの型の工夫
 - ②話し合いの形態の工夫
 - ③学年や習熟の程度に応じた段階的な練り上げ活動

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

① 目指す児童像

ア 進んで学習に取り組み、友だちと考えを高め合う子

イ 自分の考えで、解決しようとする子

② 豊かな学力を育むには、

仮説Ⅰ「練り上げに取り組ませることで、高め合う喜びを味わわせることができる」と考え、手立てを工夫する。

③ 確かな学力をつけるには、

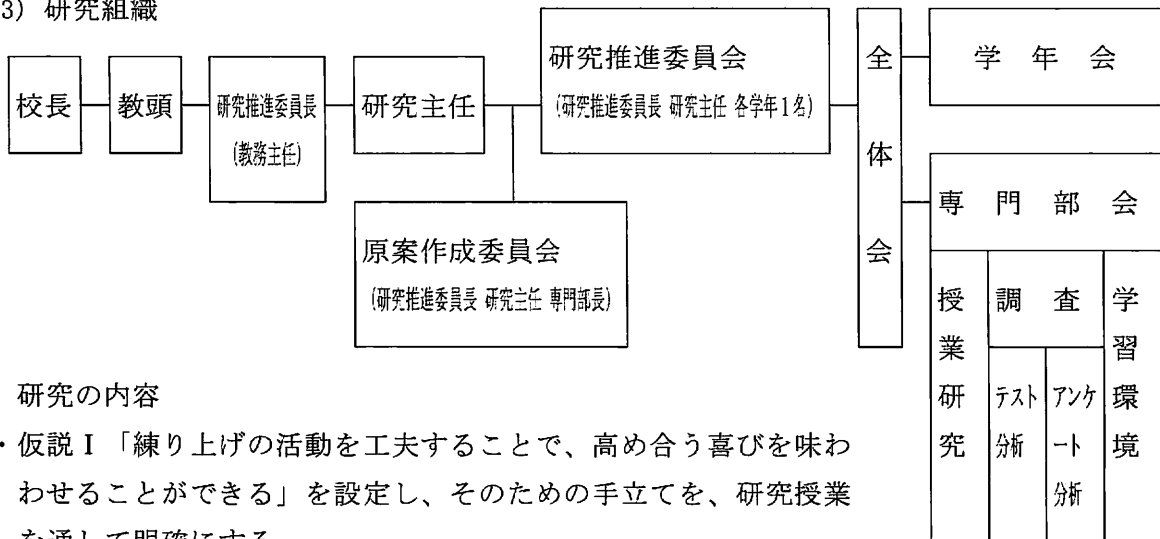
仮説Ⅱ「個に応じた指導を充実することで、できる喜びを味わわせることができる」と考え、手立てを工夫する。

(2) 研究主題設定理由

算数科の研究を続け、問題解決的な学習過程については、全職員共通理解し、日々の授業においても実践されている。しかし、練り上げの段階になると、児童のコミュニケーション能力が育てられていないこと、教師自身が指導方法に悩みを抱えていることが原因となり、広がりや深まりを得られないことが課題となってきた。個に応じた指導を充実させ、一人一人に考えをもたせ、できる喜びを味わわせる手立てが見えてきた今、さらにそれを出し合い、練り上げの活動を通して、高め合う喜びを味わわせるには、どのような手立てが必要なのか、職員の課題意識も高まってきた。

「一人一人のよさを伸ばし、学力をつけて欲しい」という保護者の願いを受け止め、学校教育目標「たくましく かしこく なかよく」を目指し、「学ぶ喜び 笑顔輝く 高北っ子」を研究主題に掲げた。そして、教師の課題である「豊かに学び合う算数科の学習活動」を副題とし、川越市教育委員会、川越市教育研究会の委嘱を受け、本研究に2年間取り組むこととした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

- ・仮説Ⅰ「練り上げの活動を工夫することで、高め合う喜びを味わわせることができる」を設定し、そのための手立てを、研究授業を通して明確にする。
- ・仮説Ⅱ「個に応じた指導を充実することで、できる喜びを味わわせることができる」を設定し、手立て①「効果的な少人数指導法」 手立て②「個に応じた指導と評価の工夫」に迫る具体的な方法を、研究授業を通して明らかにする。
- ・仮説に迫る手立ての検証を、客観的データと、児童の情意面を見るアンケートの分析からの両面から行う。

3 実践事例

(1) 主な研究実績

19年	6/18	第1回講演会	講師	川越市立霞ヶ関南小学校教諭
	7/ 2	第1回授業研究会 6学年	指導者	川越市立仙波小学校長
	7/ 4	少人数指導実践報告会		
	7/23	研究3部会 [・授業研究部 ・調査部 ・学習環境部]		
	8/24	全体研修 [模擬授業] (算数・学級活動)		
	8/24	第2回講演会	講師	川越市立霞ヶ関南小学校教諭
	9/21	第2回授業研究会 4学年	指導者	川越市立山田小学校教諭
	10/ 5	第3回授業研究会 1学年	指導者	川越市立教育研究所指導主事
	10/26	第4回授業研究会 3学年	指導者	所沢市立小手指小学校教諭
	11/19	第5回授業研究会 特別支援学級	指導者	川越市立教育研究所指導主事
	11/26	第6回授業研究会 5学年	指導者	川越市立山田小学校教諭
	20年	1/28	第7回授業研究会 2学年	指導者
2/ 3		研究3部会 [・授業研究部 ・調査部 ・学習環境部]		
3/10		全体研修 [・本年度の成果と課題 ・来年度の研究の方向性]		

(2) 学習の基盤づくり

- ① 問題解決的な学習過程に取り組む(表中の(関連))については、下記に詳細を記述)

学習過程	学習活動	指導上の留意点
つかむ	問題を知る 課題をつかむ	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項を確認する ・分かっていること、聞いていることを確認する ・前時との違いに気づかせる
解く	自力解決する	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを1つ以上もたせる（関連①） ・個の学習の状況に応じた支援を行う（関連⑥） ・個人内練り上げをさせる
話し合う	発表する （関連②）	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを説明させる ・友達の考えを聞き取らせる
	練り上げる	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの視点を与える（関連③） ・話し合いの形態を考える（関連④） ・段階的な話し合いの仕方の指導を行う（関連⑤）
まとめる	課題の答えについてまとめる	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の言葉でまとめさせる ・全体でまとめの言葉を確認し、書かせる
使う （関連⑥）	練習問題を解く 学習を振り返る	<ul style="list-style-type: none"> ・学習事項を使わせ、理解を深めさせる ・学習事項の習熟の程度を確認する ・本時の学びを振り返らせ、意欲化を図る

② 算数科の基礎基本に取り組む

	考える手段	計算のきまり	四則計算	数の仕組み
<small>具</small> 体 ↓ 小 数 線	<ul style="list-style-type: none"> ・ 絵、○、ブロック ・ かさ、数直線、表 ・ アレイ図、グラフ ・ 式 	<ul style="list-style-type: none"> 四則計算 交換 分配 結合法則 等号の意味 	<ul style="list-style-type: none"> たし算 筆算 ひき算 筆算 かけ算 筆算 九九 わり算 筆算 	<ul style="list-style-type: none"> 数の合成 整数 小数 分数 の仕組み 十進位取り記数法

ア 考える手段として、数直線については、解く（自力解決する）段階で、全児童が用いることができるよう、重点的に、学年に応じ指導する。（関連①）

イ 業前の「基礎基本の時間」において、上記の学習内容の補充を行う。

ウ 「算数の発表の仕方」については、統一して指導を行う。（関連②）

エ ノート指導については、低中高学年別に統一した指導を行う。

オ 年間指導計画については、問題・課題・まとめが一目で分かるようにする。

(3) 仮説Ⅰ 「練り上げの活動を工夫することで、高め合う喜びを味わわせることができる!」の手立て

① 練り上げの型の工夫 (関連③)

話し合いの視点を明確にして、児童に練り上げ活動を行わせる。

- ・並列型 (考えのよいところを探す。)
- ・序列型 (はやく、かんたんに、せいかくに、いつでも使える方向で検討する。)
- ・統合型 (似ているところ、もとになる考えを見つけていく。)
- ・混合型

② 話し合いの形態の工夫 (関連④)

低中高学年(習熟の程度)に応じて、話し合いの形態を工夫し、段階的に重点を置いて指導する。(太字は、重点を置いて指導する話し合いの場面)

- ・低学年 (個人内で練り上げる→ペアで発表し合う→全体で練り上げる)
- ・中学年 (個人内で練り上げる→小集団で発表し合う→全体で練り上げる)
- ・高学年 (個人内で練り上げる→小集団で発表し合う→全体で練り上げる)

③ 学年に応じた段階的な話し合いの仕方の指導 (関連⑤)

低中高学年別に、聞くこと、話すことの目標を明確にし、段階的指導していく。

④ もとになる考えの累積的な指導

自力解決する際、考えのよりどころとなる「もとになる考え」を、各学年ごとに洗い出し、基礎基本として定着させ、既習事項として使えるよう指導を積み重ねていく。

(4) 仮説Ⅱ 「個に応じた指導を工夫することで、できる喜びを味わわせることができる」の手立て

① 少人数指導の充実

習熟の程度に応じたコース別学習を積極的に取り入れ、複線型の指導案を立案する。

② 個に応じた指導と評価の工夫 (関連⑥)

主に、「自力解決」と「使う」の段階で、一人一人の学習状況や習熟の程度を評価しながら、それに応じた指導を実施する。

- ・「自力解決」の段階 (算数コーナーの活用、ヒントカードの利用、座席表を利用した支援計画、評価Cの児童への手立ての明記)
- ・「使う」の段階 (習熟プリントの選択、振り返りカードの活用)

4 研究の成果と課題

仮説Ⅰ、Ⅱに迫る手立てが明確となり、日々の授業に取り入れられるようになってきた。特に、教師の指導上の悩みである仮説Ⅰの練り上げについては、学年に応じた指導の段階と、指導の重点が明確となり、同歩調での指導の積み重ねの基盤づくりができたことは、大きな成果と言える。また、児童の情意面のアンケート結果からは、仮説Ⅱのできる喜びを味わっている児童が多くなってきていることも分かった。

一方、仮説Ⅰについては、自分の考えをもっているものの、それを出し合い、話し合いができていないと感じている児童が過半数もいることが分かった。手立てが明確になってきた今、研究授業を通して、教師の力量をより一層高め、日々の授業の中での継続的な指導による効果を期待したい。また、各種テスト等の分析を確実にを行い、客観的データから仮説に迫る手立ての検証を実施していく必要がある。

「子どもが生き生きと活動する算数科指導法の工夫・改善」

川越市立高階西小学校

研究のポイント

- 系統性を重視した指導を展開し、基礎・基本の徹底を図る。
- 問題解決的学習を推進し、特に話し合い（練り上げ）の仕方を工夫し、共に学び合う授業を創造する。
- よりよい授業のための教材・教具の整備を進める。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

系統性を重視した授業実践の中で、次のような児童の育成を目指す。

算数科の授業の中で生き生きと活動する児童

- ・自ら進んで学習に取り組み、算数の学習を楽しむ子
- ・既習事項を生かして、自分の考えをもてる子
- ・考えのよさを認め合い、よりよい解決へと高め合う子

- ① 問題解決的な学習を推進する中で、練り上げの在り方について検討する。
- ② 習熟を図るスキルタイムの指導計画を作成する。
- ③ 算数に興味・関心を持たせるための環境整備を行う。

(2) 研究主題設定理由

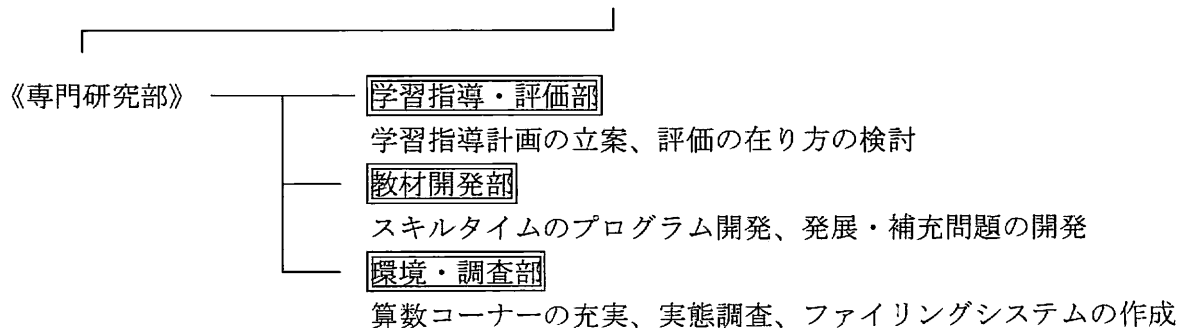
現在、算数科では、「ゆとりの中で基礎・基本の確実な定着」「楽しさと充実感のある学習」「児童の主体的な活動の重視」が求められている。

本校の児童は、明るく子どもらしい気持ちをもつ反面、自分に対する自信が持てない児童が多い。特に、学習では算数に対する苦手意識が強い。確かに、入間地区算数学力調査や教研式標準学力検査の結果を見ても、学力が十分に備わっているとは言えない。また、思考力や表現力も十分でない。そのため、学年が進むにしたがって算数の学習に対して意欲的に取り組める子とそうでない子がはっきり二分化されている現状がある。

本校の児童に、生き生きと活動する算数科の授業を展開することは、算数の学力をつけるとともに、学校生活への意欲を高め、さらには、自分に自信をもち友達を大切にする気持ちを育てることにも通ずると考え、本主題を設定した。

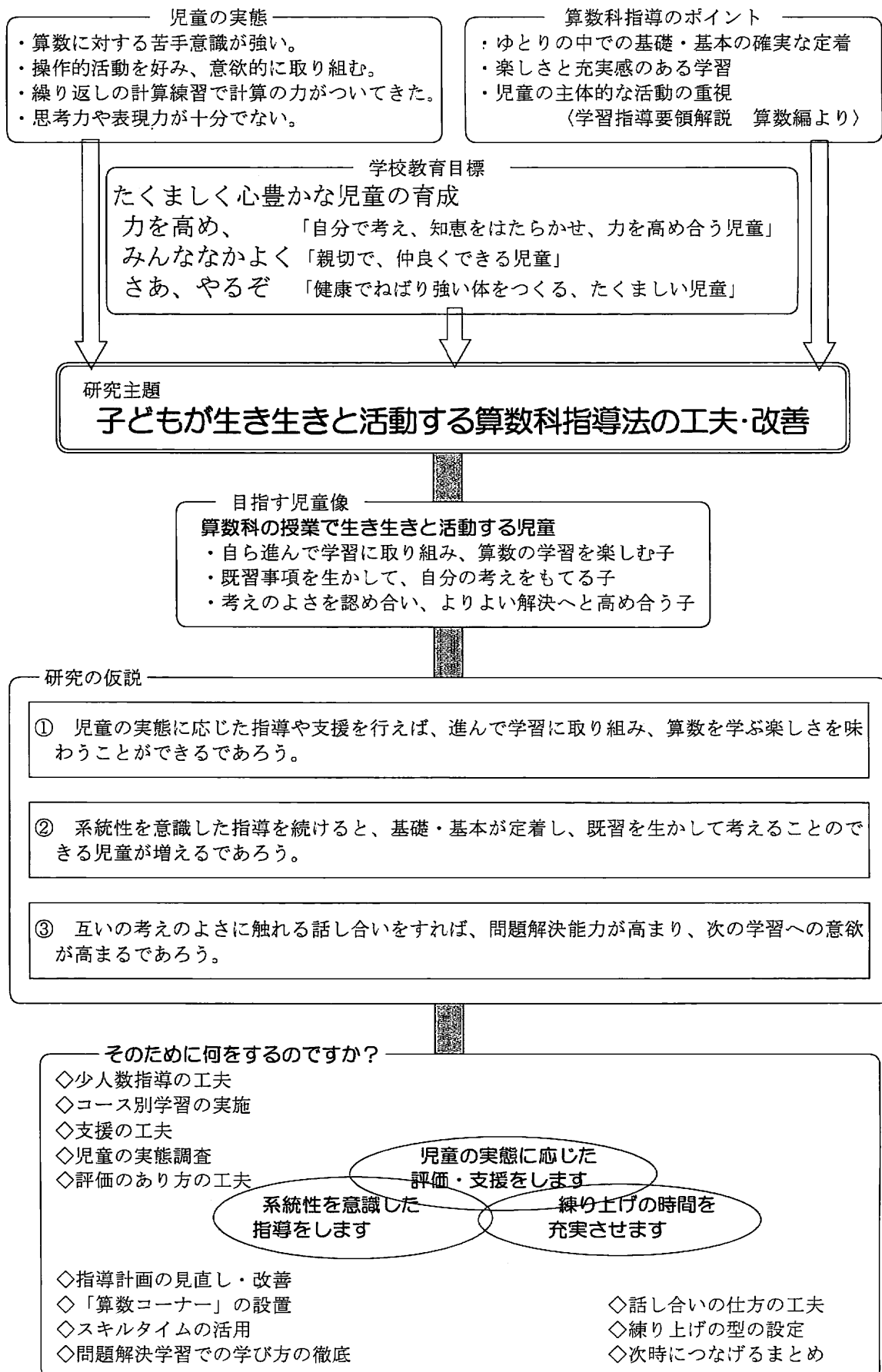
(3) 研究組織

校長 — 教頭 — 研究小委員会 — 研究推進委員



2 研究の内容

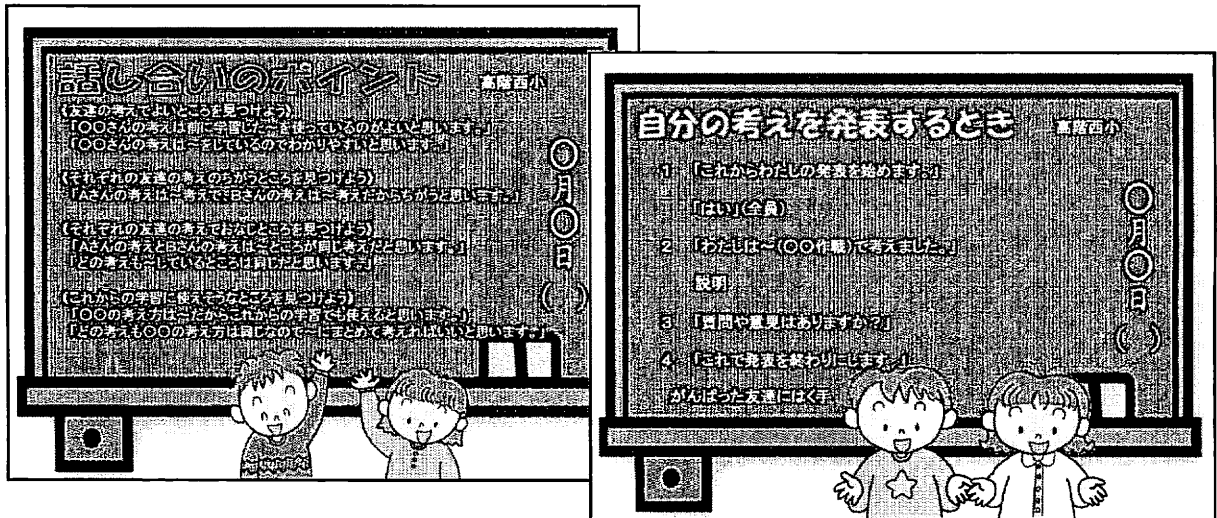
(1) 研究構想図



(2) 専門部の取組

①授業研究部

- ・指導案の形式作成
- ・練り上げの型についての検討 → 統合型・序列型・並列型
- ・話し合いの仕方のモデル作成



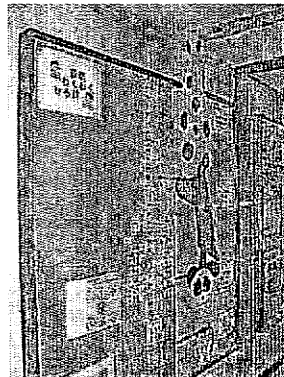
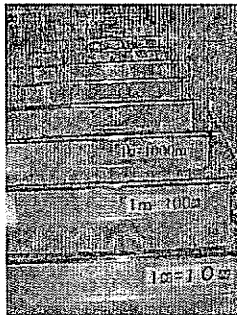
②調査環境部

児童の実態調査（7月・1月）

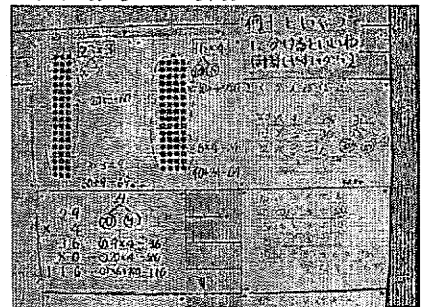
- ・校内の算数コーナーの設置

算数わくわく広場

西
階
段



少人数教室の算数コーナー



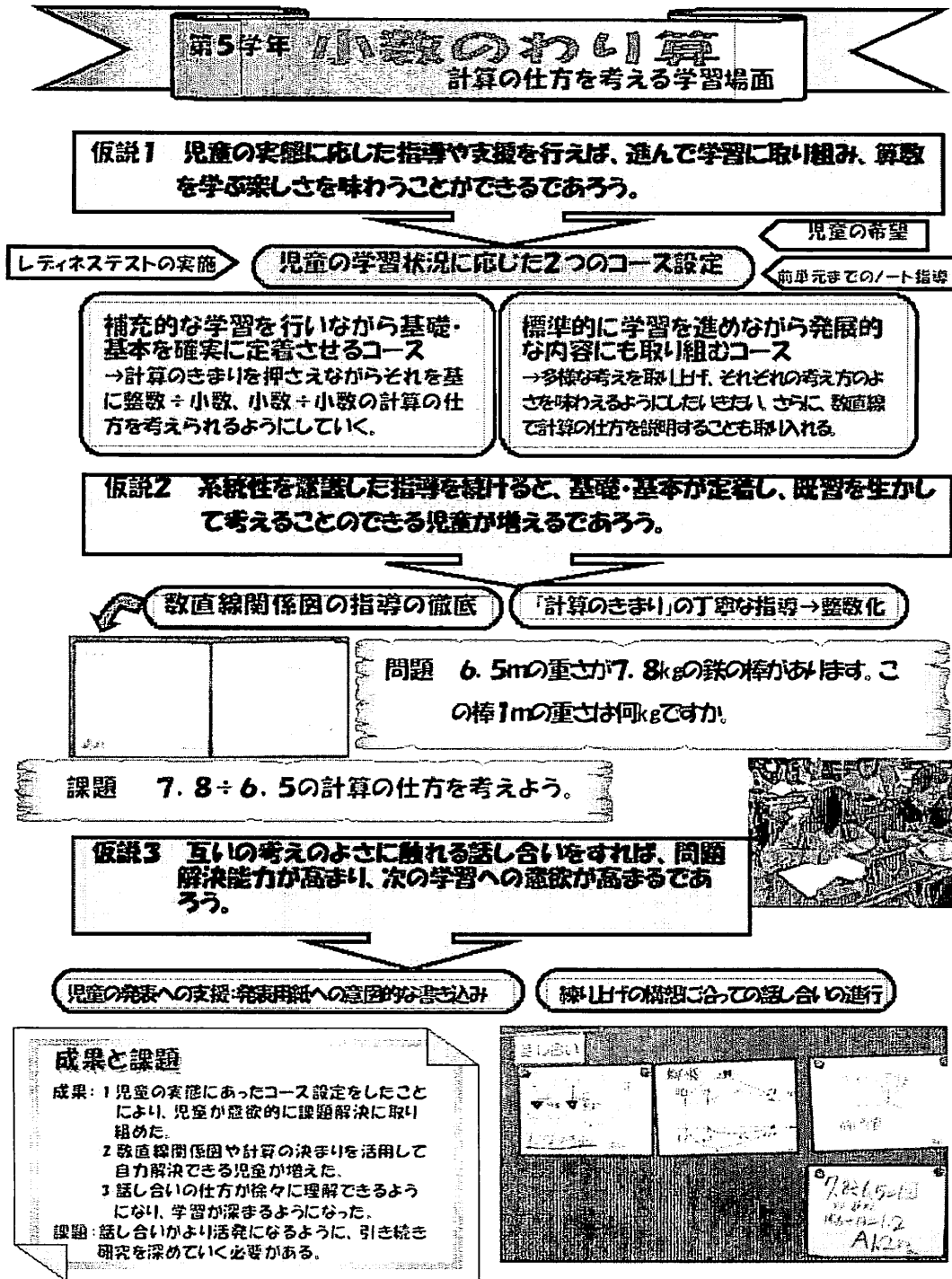
③教材開発部

- ・スキルタイムの年間計画作成
- ・スキルタイム用のプリント作成

第1学年 算数スキルタイム年間計画

	月	回	単元等	指導のねらい	例題
一 学 期	4	1	なかまづくり	身の回りのものの数量に関心を持ち数や量の基礎となる経験をする。	どんな野菜さんたちがいますか。仲間ごとに分けましょう。
	5	2	かずのなまえ	10までの数について数の数え方、数字の読み方、書き方、数の構成を知り、数の概念を理解する。	ねこは全部で何匹いますか。その数を数字で書きましょう。
	6	3	いくつといくつ	10までの数の構成を理解し、数を多面的にとらえることができる。	7は、□と3、さくらんぼ計算
		4	あわせていくつ ふえるといくつ	加法の意味と和が10以内の加法計算のしかたを理解し、それをを用いることができる。	5 + 2 6 + 4
	7	5	のこりはいくつ ちがいはいくつ	被減数が10以内の減法計算ができる。0を含む減法の計算の意味を理解する。	8 - 3, 10 - 5, 2 - 0, 7 - 7

3 実践事例



4 研究の成果 (○) と課題 (●)

- 問題解決的な学習の流れを理解しながら、自力解決の場面で、既習事項を使って自分なりに解決しようとするようになってきた。
- 話し合い（練り上げ）の仕方を見事に示し繰り返し指導することによって、徐々に自分の考えを発表できるようになってきた。
- 算数の学習に自信を持って取り組める基礎・基本の力を確実につけ、進んで取り組もうとする意欲をさらに喚起する授業を目指し、研究を深めていく。

「児童一人一人に確かな読みを身に付けさせる指導法の工夫」

川越市立寺尾小学校

「確かな読み」とは・・・

叙述に即して、内容や要旨を正しく把握しながら読むこと

研究のポイント

- 1 教師の指導力の向上を目指す。
- 2 研究のポイントを「確かな読み」に絞り、さまざまな手立ての開発を目指す。
- 3 少人数指導やグループ学習など、学習形態を工夫して主体的な学習を目指す。
- 4 発達に応じた「めざす児童像」を検討し、活動の目的を明確にする。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

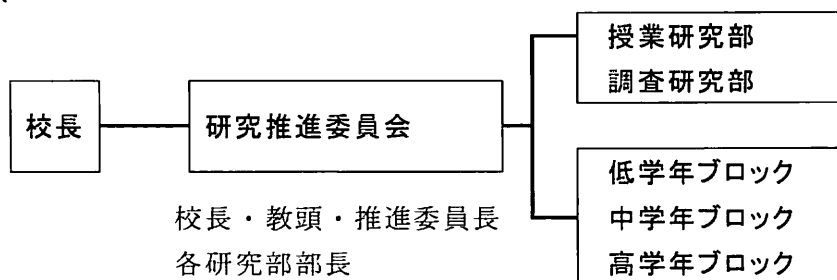
- ① 学習形態や指導法を工夫することによって、いきいきと主体的に学習に取り組める児童を育成する。
- ② 学年の系統性をふまえた教材研究をすることによって、発達に応じた「読み」の力を身に付けさせる。
- ③ 継続的に取り組む場を設定することによって、基礎基本の定着を図る。

(2) 研究主題設定理由

「生きる力」、特に「確かな学力」とは、知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたものである。本校では、それらを【習得・探求・活用】と捉え、そのすべてに通じる根幹的な能力として言語能力が重要であると考えた。

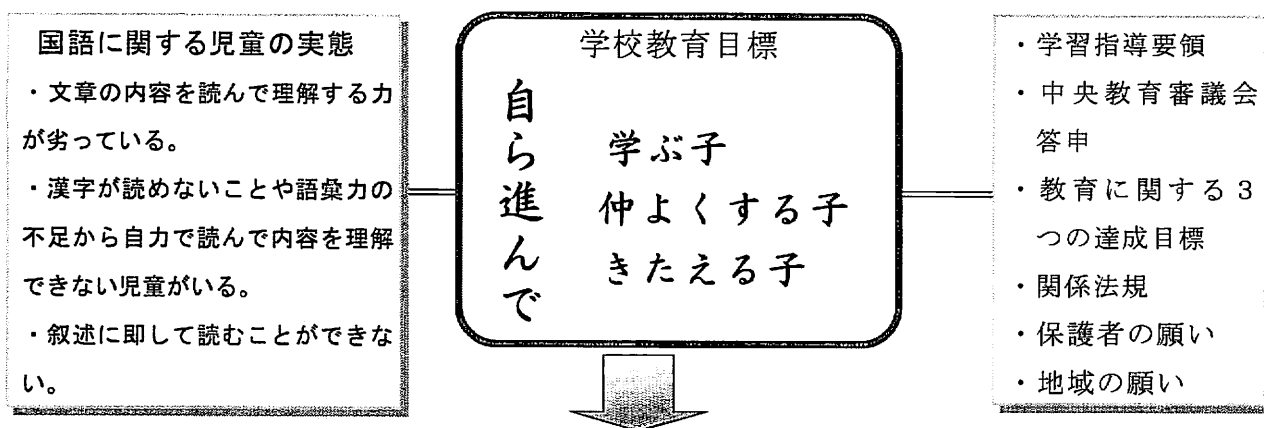
本校の児童は、明るく素直であり、学習に真面目に取り組む子が多い。また、学習課題を自らのものとし、意欲的に活動し、考える力もついてきている。しかし、一方では、漢字が読めなかったり、文章の読み取りが不十分なために、容易に学習を進めることができない児童の存在も明らかになってきた。そこで、要旨や内容を正しく把握しながら、文章をすらすら読むことができる児童の育成をすることが急務であると考えた。そして、すべての教科に関係してくる国語科の読みの力を付けることが大切であることから、研究主題を「児童一人一人に確かな読みを身に付けさせる指導法の工夫」として、本研究に取り組むことにした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 全体構想図



研究主題

「児童一人一人に確かな読みを身に付けさせる指導法の工夫」

「確かな読み」とは・・・

叙述に即して、内容や要旨を正しく把握しながら読むこと

目指す児童像

○表現された内容を正確に理解できる子

(学年毎、発達に応じた「目指す児童像」を研究の中で明らかにしていくことも研究の目的である)

< 研究の重点 >

- ①主体的に学習に取り組めるよう学習形態や指導法を工夫する。
- ②学年の系統性をふまえた教材研究をし、継続的に取り組む場を設定する。

手 立 て

○低学年

- 挿絵を使いアニメーション的手法であらすじをとらえさせる。
- 吹き出しを使って想像を膨らます読み方をさせる。
- 5W1Hを押さえることにより、順序を考えながら、あらすじを話したり書いたりさせる。

○中学年

- 重要な語句に注目させ、サイドラインを引いたり、ワークシートに記入したりする。
- 多様な読みをし、中心となる文を見つけまとめる活動をする。
- 自分の書いた文章を読み返して推敲することを意識させる。

○高学年

- 同作者の他の作品にも触れさせ、比較や考察の材料とする。
- 課題を自ら見つけさせ、自力学習の機会を増やす。
- 話し合い活動を取り入れ、深い読みとりにつなげていく。
- 辞書を常備し活用の機会を持つ

- 1時間毎に音読の評価をする。
- 様々な形態の音読の機会を増やす。
- 関連資料を用意する。
- 言語事項の時間を毎回取り入れる。
- グループ学習や少人数指導などの形態を工夫する。
- 学年の系統をふまえた教材研究をし、「目指す児童像」や「目標」を明確にする。

3 実践事例

(1) 平成19年11月21日(水)第6学年国語科授業研究会

少人数指導

① 単元名・教材名 表現を味わい、豊かに想像しよう

「やまなし」「(資料)イーハトーヴの夢」

② 児童の思いや願いと本単元の意図

今までの学習活動の様子を見てみると、音読や文章の叙述に即して読むことについて得意な児童とそうでない児童との差が大きく、苦手な児童は学習に対する意欲が低い状態になってしまふことが多い。また、本作品は、「素晴らしい、面白い。」という感想を持つ児童がいる一方で、「何かよくわからない、おもしろくない。」という感想を持つ児童に分かれる作品である。そこで、この単元を習熟の程度に応じたコースによる少人数指導で取り組み、個人差の大きい児童に対応したり、児童がコースを選択することによって主体的に取り組んだりできるようにしたいと考えた。自分の力で読むことのできる児童には、効果的な表現やイメージ豊かな表現に着目して「やまなし」の世界観を味わわせていく。さらに、他の宮沢賢治の作品を読み味わい、イーハトーヴの世界を感じ取る学習を中心に進めていく。反対に読むことを苦手とする児童には、音読の時間も余裕を持って取り組みせ、「やまなし」一作品をじっくりと読み味わうことができるように学習を進めていく。そして、中位の児童たちには、「やまなし」を時間をかけて読み取らせ、他の作品にも触れながら読む力を身につけさせていきたいと考えた。

③ 確かな読みのための手立て

手立て1 学習形態を「少人数指導」とし、児童の実態や思いに応じた課題や学習展開を設定する。

★「かにさん」コース→→→かにの兄弟の心情を読みとり、それを表現するような音読を工夫する。

★「五月」vs「十二月」コース→五月と十二月の対比により、かにの心情や情景を読みとる。

★「賢治ワールド」コース→賢治の他の作品を同時に読み、賢治が言いたかったことに迫る。

手立て2 音読する機会を多くする。

手立て3 着目させたい語に、サイドラインを色分けして引く。

(賢治作品は擬態語・擬声語や比喩表現など)

手立て4 毎時間「言葉の学習」の時間を設け、繰り返して学習させる。

「やまなし」や賢治作品における確かな読みのための手立て

手立て5 情景を視覚化するための材料をそろえておく。(ビデオ、絵、写真)

(「かにさん」コース)

手立て6 「五月」と「十二月」の対比から、主題を考える。

(「五月」vs「十二月」コース)

手立て7 「やまなし」以外の賢治の作品にも触れ、作者が伝えたかったことを考える。

(「賢治ワールド」コース)

4 研究の成果と課題

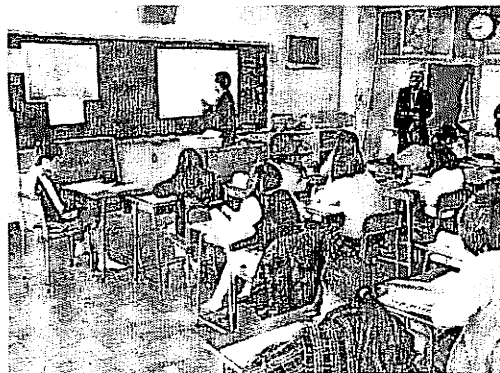
<成果>

- 昨年度に引き続き、本年度も全学年で研究授業を行い、授業の質と教師の意識が向上した。
- 少人数指導やグループ学習など、学習形態を工夫することによって、主体的に学習に参加する児童が多くなった。
- 音読の機会を多く設けることによって、音読に対する意欲と意識が高まった。初めて触れる文章でもすらすら読める児童が増えてきた。
- 継続的に「言葉の学習」の時間を授業の中に取り入れ、繰り返して学習させることによって、言語事項の定着を図ることができた。
- 自分から進んで図書室に出かける児童が多くなった。
- 問題解決的な学習活動を展開することで、児童一人一人の思考力や表現力が高まりを見せた。
- 朝の基礎学習の時間では、「教育に関する3つの達成目標」の「できるかな」テストに繰り返し取り組ませることによって、基礎的事項の定着を図ることができた。
- 教材研究を進めるほどに、教材の読みとりが深くなることに教師が気づいた。
- 学年毎の「めざす児童像」を検討し、まとめていく作業を進め、「読みの力」を系統的に考察することができた。

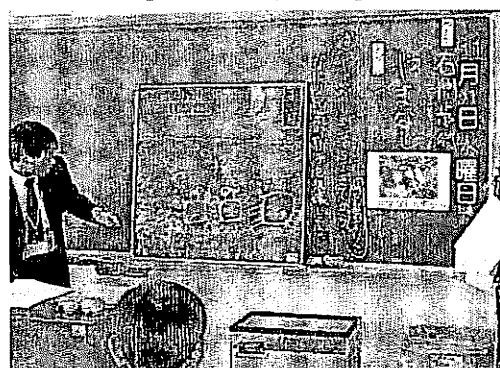
<課題>

- △確かな読みのための手立てが数多く提案されているが、学年による系統性を持たせる検討が必要である。
- △児童の話し合いの力に課題が見られるので、さらに指導していけば、深まった話し合いができるようになるであろう。
- △少人数指導やグループ学習など、様々な学習形態にどのような効果があり、どのような場面で使うと効果的なのかを明らかにする必要がある。
- △確かな読みのための手立てを、さらに開発していきたい。
- △学年に応じた「目指す児童像」の検討をさらに進め、精度を上げていきたい。

「かにさん」コース



「五月」 v s 「十二月」コース



「賢治ワールド」コース



「のびる・できるを目指した体育科指導法の研究」

川越市立大東東小学校

1 研究の概要

平成19年度 川越市教育委員会委嘱 体育科研究の概要

<学校教育目標>

- やさしく
- かしこく
- たくましく



「のびる・できるを目指した体育科指導法の研究」
 ～基礎的・基本的技能を身につけた子どもを育てるために～

《めざす児童像》

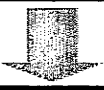
- 基礎的・基本的技能を身につけた子
 (学習規律やルール、マナーが身に付いている 安全に気をつける)
- 友達の良さを認め、協力し合う子
 (教え合い、励まし合いができる 仲間を思いやる気持ちがある)
- めあてを持ち、進んで運動できる子
 (自分の力を知る 自ら意欲的に取り組む あきらめずに取り組む)

仮説1



個に応じた指導・評価を工夫することにより

- 指導と評価の一体化
 - ・個別評価を行う
 - ・場面を限定し、評価する
 - ・具体的な評価規準表を作成する
- 教師の言葉かけ
 - ・子どもの伸びをほめる
- 学習カード・資料の工夫
 - ・友達同士で相互評価を行う
 - ・技のポイントを示す
- 学習規律やマナーの定着
 - ・安全への配慮をする



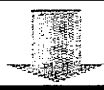
友達の良さを認め、協力し合う子が育つであろう。

仮説2



学習過程や授業の展開を工夫することにより、

- 児童の実態 (技能・意欲) に合った学習過程の工夫
 - ・共通課題への取り組みをする
- 授業のシステム化
 - ・運動量の確保をする
 - ・場、用具の工夫をする
 - ・短い説明をする
- 魅力ある授業の展開
 - ・ゲーム化、競争化等を行う
 - ・導入の工夫をする
 - ・スモールステップを行う
 - ・自分の課題を明確にする



めあてを持ち、進んで運動できる子が育つであろう。

仮説3



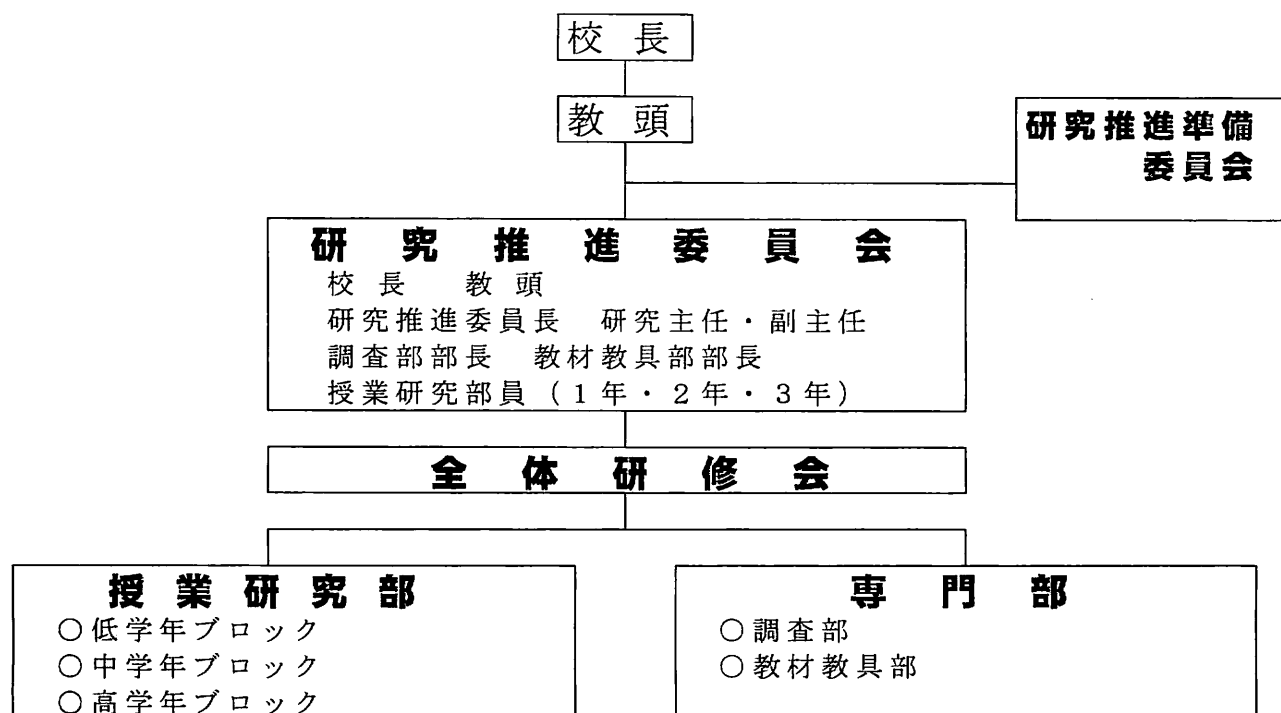
基礎的・基本的技術の系統性を明らかにし、重点的な指導を行うことにより

- 重点教材の系統表の作成
 - ・単元の学習内容の基礎・基本的技術を明確にする
 - ・技のポイントを押さえる
 - ・次学年も見通した指導を行う
- 基礎感覚作りを目指した準備運動の実施
 - ・すくすくプログラムを行う
 - ・楽しく、主運動につなげる内容で行う



基礎的・基本的な技術を身につけた子が育つであろう。

2 研究組織



3 研究内容

(1) 研究経過

月 日 (曜)	研修項目	研修内容
4月26日 (木)	研究推進委員会	・研究の方針
5月11日 (木)	研究推進委員会	・組織等について
5月14日 (月)	全体研修会 (4:20~5:00)	・研究の方針等について
5月17日 (木)	全体研修会	・実技研修
6月7日 (木)	学年部会	・授業研究協議会について、 ・領域について
6月21日 (木)	全体研修会	・講師を招いての理論研修 講師：川越市立教育研究所 指導主事
7月5日 (木)	全体研修会 6年授業研究協議会	授業者：本校教諭 指導者：川越市立教育研究所 指導主事
7月12日 (木)	研究推進委員会	・夏休みの研修について ・2学期の授業研究会について (各学年からの報告、領域について)
7月23日 (月)	14:45~16:30	・全体研修 (実技研修)
8月6日 (月)	10:45~12:00	全体研修 (実技研修)
	13:00~14:30	専門部会、学年部会 (指導案検討)

8月21日(火)	13:00~14:30 14:45~16:30	・全体研修(実技研修) ・学年研修
8月22日(水)	13:00~14:30 14:45~16:30	・専門部会 ・学年研修
8月23日(木)	9:00~10:30	・全体研修(理論研修・講師による) 講師:川越市立教育研究所 指導主事
8月27日(月)	9:00~10:30 10:45~12:00	・研究推進委員会 ・専門部会
9月6日(木)	全体研修会	・2学期の授業研究協議会について
9月17日(木)	学年研修会	・10月の授業研究協議会について
9月27日(木)	全体研修会	・授業研究協議会について
10月4日(木)	学年・ブロック研修 全体研修会 3年授業研究協議会	授業者:本校教諭 指導者:川越市教育委員会 指導主事
10月25日(木)	2年授業研究協議会 (低学年ブロック)	授業者:本校教諭 指導者:川越市立川越西小学校教諭
10月29日(月)	学年ブロック研修	・11月の授業研究会について
11月2日(木)	全体研修会	・実技研修
11月15日(木)	4年授業研究協議会 (中学年ブロック)	授業者:本校教諭 指導者:川越市教育委員会 指導主事
11月22日(木)	全体研修会 1年授業研究協議会	授業者:本校教諭 指導者:川越市教育委員会 指導主事
11月27日(火)	5年授業研究協議会 (高学年ブロック)	授業者:本校教諭 指導者:川越市教育委員会 指導主事
11月29日(木)	全体研修会	・ブロック別研究授業の報告
12月13日(木)	研究推進委員会	・研究のまとめについて
1月31日(木)	全体研修会 ブロック研修会	・研究のまとめ(専門部の報告) ・研究のまとめ
2月8日(金)	研究推進委員会	・原稿印刷
2月14日(木)	研究推進委員会	・来年度の研修の方針について
2月28日(木)	全体研修会	・来年度の研修の方針について
3月6日(木)	全体研修会	・研究紀要読み合わせ

(2) 専門部の活動内容

① 調査部の活動

○ 活動のねらい

本校の体育科の研究では、研究主題「のびる・できるを目指した体育科指導法の研究」を達成するために調査部を設置し、児童の関心や意欲、運動技能などを調べ、分析し、体育の授業に役立てることを目指すこととした。

○ 活動内容

・ 体育アンケートの作成

体育の学習や運動に対する意識を調査するアンケートを作成し、全学年対象に6月と12月にアンケートを実施した。体育に対する関心や意欲の変化を分析した。

・ 基礎技術の調査

本校で身につけたい基礎技術に沿った項目で調査を実施した。6月1日に調査を行った。

・ 技の系統表の作成

走跳の運動、鉄棒、跳び箱遊び、跳び箱運動、マット、ボール運動の5つの視点から、技の系統表を作成した。

本校における学年の重点項目がわかるようにした。

② 教材教具部の活動

○ 活動のねらい

教材教具部では、研究主題「のびる・できるを目指した体育科指導法の研究」を達成するための研究仮説を受け、以下のような視点で教材教具の作成を計画し、取組を進めた。

- ・ 児童の学習意欲を高めること。
- ・ 児童が活動時間（運動量）を確保すること。
- ・ 児童が運動技能を身につけられるようにすること。
- ・ 児童の安全を確保すること。

○ 活動内容

・ 跳び箱運搬車の作成

児童が跳び箱の運搬を安全かつ容易に行えるように、平面にキャスターを取り付けた「跳び箱運搬車」を作成した。

台の量サイドには、跳び箱の落下を防止するためのストッパーを取り付けた。

4 研究の成果と課題

原則として、職員全員公開授業（模擬授業、先行授業を含む）を行った。研究協議等でご指導いただいたこと。また、協議する中から見えてきた成果と課題は以下の通りである。

< 成果 >

- ・ 授業を見合うことで、意見交換を行い、自身の指導法の長所や短所がわかった。
- ・ 体育授業のマネジメント（声かけ、運動量の確保のしかた、評価方法等）の方法について学ぶ機会となった。
- ・ すくすくプログラムを含んだ基礎感覚を身につけるための準備運動を取り入れ、子どもに身につけさせることができた。
- ・ 教具を作成することで、準備時間を短縮し、授業の中の子どもの運動量等を確保できるようになった。

< 課題 >

- ・ 子どもたちが身につけるべき基礎的・基本的技能を明確にし、具体化していくためにさらなる工夫が必要である。
- ・ 学年に応じた子ども同士の学び合い、教え合いを活発に行えるよう指導していくことが必要である。
- ・ 教師が身につけるべき体育授業のマネジメントを明確にし、授業を通して学んでいくことが必要である。

研究主題

認め合い、分かり合う心豊かな児童の育成

～「伝え合う力」を大切にした学級活動の実践を通して～

川越市立霞ヶ関東小学校

研究のポイント

- 学級活動の指導法の研修
- 学級活動の事前・事後活動での児童との関わり方
- 話し合い活動における支援の仕方

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

「伝え合う力を育てる場」を大切に学級活動の実践において、仲間を思いやりながら、生活の問題をよりよく解決しようとする心豊かな児童を育成する。

育てたい力

- 自他を尊重する心情と思いやりの心をもって生活する態度
- 自分の思いや考えを進んで言葉で伝え、相手の思いや考えを理解できる力
- 自分たちの生活の課題に関心を持ち、解決したいという積極的な意欲
- よりよい解決に向けて取り組もうとする実践力や判断力

(2) 研究主題設定の理由

本校は児童数428名、クラス数13学級の比較的小さな規模の学校である。入間川河畔にあり自然が豊である。また、古くからの住宅地が広がる一方、学区には牛塚古墳があり、隣接する地区には 河越氏館跡などの史跡も多い。

研究において本校は、平成18年度の校内研修で「教育に関する3つの達成目標」である「確かな学力」「豊かな人間性」「健康と体力」の3つを取り上げ、バランス良く身につけさせるための学校教育活動を具体的に推進してきました。また、人権教育についても、学校教育全体の中に位置づけて、諸行事、諸活動の中で再認識を図り、指導内容の工夫改善を積み重ねました。

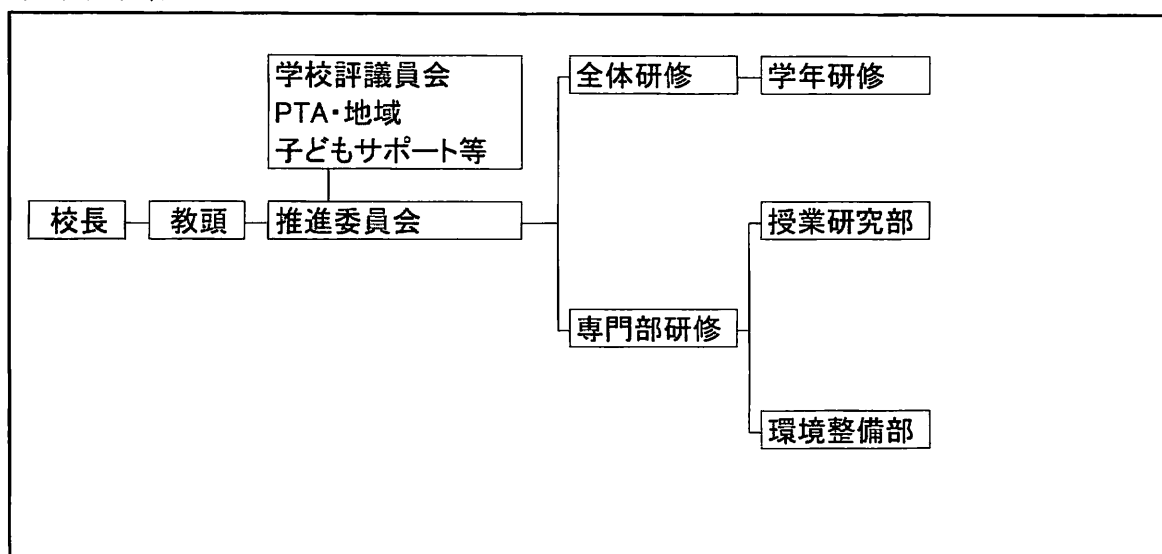
成果としては、道徳授業や諸活動の中で人権に対する意識の高揚が見られるようになった。また、学級や学年、縦割り集団での活動等の、仲間と一緒に活動することや、学習の中で自分の考えたことを発表したり討論したりする中で「教育に関する3つの達成目標」の「生きる力」が身につくところがある。

課題としてはこれからも児童が、体験的な活動を通して、課題を自分で見つけ、主体的

に取り組めるような授業を展開することである。

そこで、私たちは「人」と「人」との「間」で生きている「人間」であることを自覚し、しっかりと自分の意志を伝えたり、相手の気持ちをくみ取ったりするコミュニケーション能力の育成を図り、伝え合う力を養い、「伝え合う力を育てる場」を大切にした学級活動を実践することで、仲間を思いやりながら、学校生活の問題をよりよく解決しようとする心豊かな児童を育成しようと考えた。

(3) 研究組織



2 研究の内容

指導法の研究

○実践研究(創造→検証授業→修正→完成)

○「子どものために」進めていく研究

○子どもの変容を私たちが喜びとし、力をつけていく研究

○提案する授業を通して霞ヶ関東小の教育実践を積みあげる研究

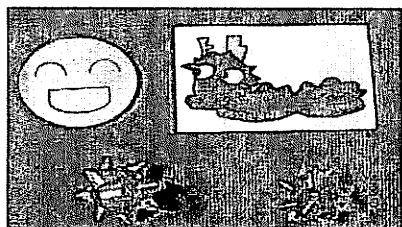
□授業研究は学年で1回授業研究を行う。

□全員研修、専門部研修を通し理論研修を行い、講師を招聘した講義や研究授業指導などを通して、指導方法論・実践研究を行っていく。

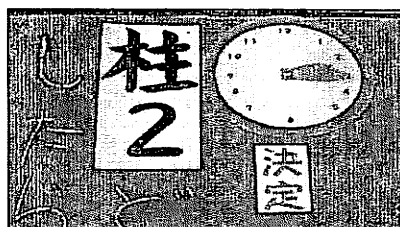
3 実践事例

授業研究部

○ 普段何気なく行っている話し合い活動の進め方を、校内で統一し、低学年から発達段階に応じて指導・支援を行い、児童が経験を積み重ねられるようにした。そのために学級会グッズを全校で用意した。また、各クラスで学級会コーナーを設けて、児童の興味関心と意欲を喚起するようにした。



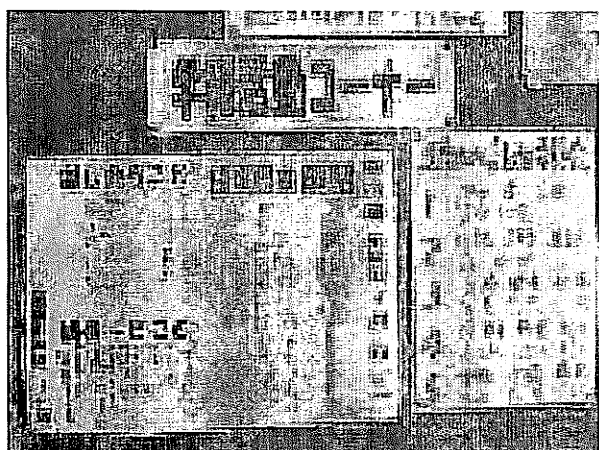
低学年用のクラスマークと決定マーク（学級会グッズ①）



話し合い時計（学級会グッズ②）

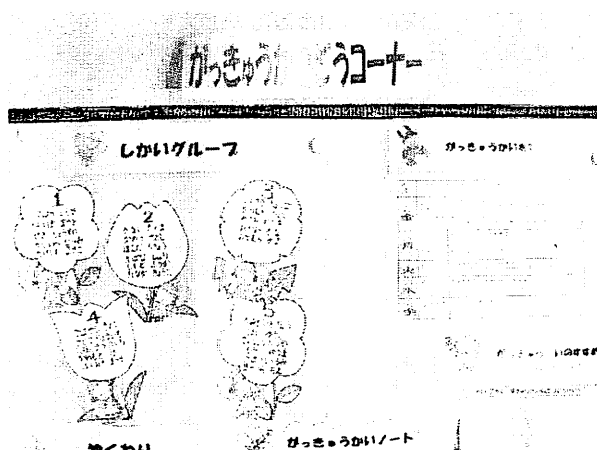


クラスマーク（学級会グッズ③）



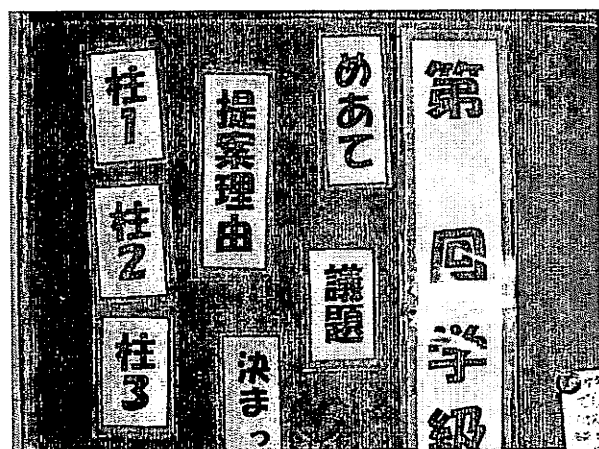
高学年の学級活動コーナー

話し合いの柱や提案理由などが書かれている。このほかに「話し合いの進め方」も掲示されている



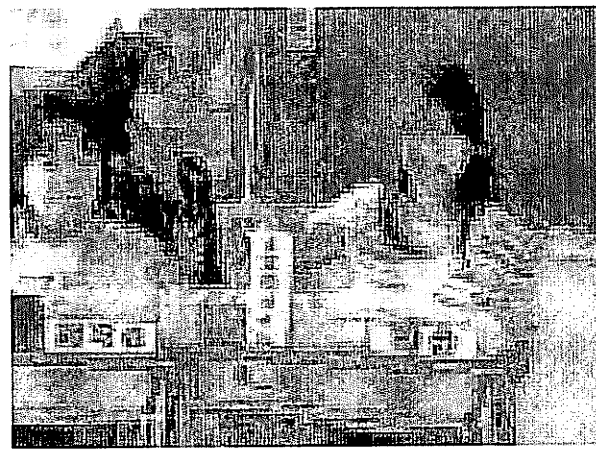
低学年の学級活動コーナー

高学年同様に話し合いの柱や提案理由などが書かれている。このほかに「話し合いの進め方」も掲示されている



学級活動カード（学級会グッズ④）

毎回使用する物はパウチをし、黒板をきれいに、素早く表現できるようにした。



高学年の学級活動の様子

「提案理由」「質問タイム」「話し合いタイム」「決定タイム」などを用意し、今何をするときかを、視覚から確認できるようにし、話し合いの自覚を持たせるようにした。

○実技研修

夏季休業中の研修では、特活主任を中心に「特別活動の力を見直そう！」と題し、全員で特活の在り方について学んだ。内容は、

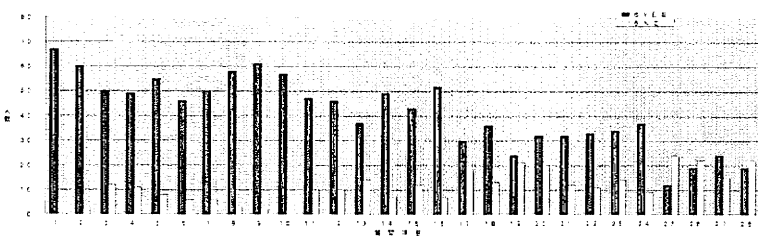
- ◇特活主任の実践報告
- ◇外部研修会の報告
- ◇演習1「1学期を振り返ってみましょう」
- ◇演習2「2学期の計画を立てよう」
- ◇演習3「計画委員の進め方」

を行い、議題の立て方や計画委員への指導の在り方を実践的に学んだ。また、指導案については、項目立てからその内容と書き方に至るまで、事細かに懇切丁寧に教えていただいた。更に、計画委員との話し合いの持ち方や、時間の確保の工夫など、各教員が行っていることを報告し合い、より良い方法を模索することができた。

環境整備部

- 児童の実態を把握するために、全校児童に対してアンケートを行った。1学期の終わりに1回行い、ほぼ全学年の授業が終わった12月にもう一度行った。下図は6年生の一例である。

下欄は、各質問項目の上部の一部である。児童の話し合いに対する気持ちや、伝えるということへの意欲を見てみることにした。



話	誰	こ	学	我	自	気	友	友	リ	困	み	考	目	み	委	自	高	代	ク	話	自	質	賛	意	司	楽	困
し	か	の	校	慢	分	軽	だ	だ	ー	っ	ん	え	標	ん	員	分	齢	表	ラ	し	分	問	成	見	会	しい	っ
たり	が	ク	生	し	の	に	ち	ち	ダ	た	な	の	を	な	会	に	者	委	ス	合	の	し	や	を	と	い	たり
遊	困	ラ	活	な	こ	友	の	の	ー	と	の	違	目	の	な	は	や	で	い	意	反	対	ま	して	議	り	悩
っ	っ	ス	が	け	と	だ	し	相	に	き	た	う	指	た	ど	人	障	会	よ	活	見	り	と	て	題	悩	み

4 成果

【成果】

- ・児童のできるようになりたい、こうなりたいという意欲を大切にし、その願いを実現する話し合いを展開することにより、確実に意欲での高揚、学力の向上を図ることができた。
- ・全学年で授業研究会を実施し、学級活動の指導法について研修を深めることができた。
- ・事前や事後の活動では、教師と児童との直接的な関わり場面を多く持つことができたので児童理解を深めると共に生徒指導に活かすことができた。
- ・話し合いの指導の中で、児童がお互いの意見を尊重し合う場面が作られ、他教科での学び合いにつながった。

*本冊子の内容は、川越市立教育研究所ホームページにも掲載されております。

(川越市公式ホームページ→市民便利帳→「教育」教育研究所 →「川越市立教育研究所」調査・研究
→調査・研究→「研究集録(委嘱学校研究資料)」平成19年度研究集録をご覧ください。)